文化財保護課

梅木遺跡

UMENOKI SITE

——発掘調査報告——

昭和61年

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序　文

前橋の地は赤城山、榛名山を背後にひかえ坂東太郎と呼ばれる利根川が流れ四季おりおりの変化に富み風光明媚な地である。

本梅木遺跡所在地は、前橋市街地からは約12㎞の地にある。この地域は上毛古墳総覧によれば365基の古墳が所在していた旧荒砥地区にある。特に国指定史跡前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳があり、近くに五料沼があり、赤城山、榛名山、谷川連峰の眺望ができ、ゆるやかな起伏に富む地形、雑木林等の自然条件に恵まれた所である。

ここに大室公園として36.9haの総合公園を本市として計画しており、性格としては古墳の保存、博物館赤城型民家の移築をしての史跡公園をつくる計画である。

それに先だち、公園計画地に散在する民家13戸の移転先の発掘調査を実施したものである。

調査の結果、多数の住居跡の発見と居館跡が発見された。そこで計画地盤より50㎝の盛土をし極力現状保存をすることになった。

今後、地域の歴史、前橋の歴史を解明するための資料が得られるとともに史跡公園として整備していく資料が得られたものと考えられる。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸に存じます。

昭和61年３月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　　奈　良　三　郎

例　言

1、本書は、大室公園造成に伴う住居移転の代替地として事前調査された前橋市西大室町に所在する梅木（うめのき）遺跡の発掘調査報告書である。

2、発掘調査は、前橋市教育委員会の依頼により、前橋市埋蔵文化財発掘調査団を組織し、山武考古学研究所が行なったものである。

3、遺跡の所在地及び調査期間は下記の通りである。

所在地　　群馬県前橋市西大室梅木2560他

調査期間　昭和60年８月20日～12月27日

昭和61年２月３日～２月８日

4、本書の図面・遺物整理は根本時子、郡司勝子、増田敏子、片岡美和子、富田弘子、黒田宣子、芦田和義の協力を得て千田が行なった。

5、本書で使用した写真は千田が撮影した。

6、本書の執筆は次の分担になっている。

福田紀雄　序文　序章第１節・あとがき　梅木遺跡の保存について

千田幸生　序章第２節・第３節・第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章・第Ⅵ章

7、本書の編集は、千田が行ない、平岡和夫が総括を行なった。

8、発掘調査の実施及び報告書刊行まで、下記諸機関、諸氏の御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第であります。（敬称略）

前橋市公園緑地課　新井房夫

9、発掘作業参加者（アイウエオ順）

（60年）青木茅子、石関コズ江、小川悦子、狩野周次郎、鹿沼さとゑ、神沢方子、片貝ハマ代、高坂花子、佐藤やよい、新保幸永、新保昌子、新保富恵、新保隆、鳥山初子、内藤よし子、蜂須賀もとめ、春山繁、舟津博、福田才吉、福島洋子、堀越豊、堀越うめ子、真庭トシ、真庭卯平、八木伸子、横堀三奈、吉田ざだ子

（61年）井川達雄、石守晃、遠藤和夫、加部二生、小菅将夫、田中稿二、新倉明彦、長谷川福次、福田瑞穂、前原照子、前原豊、町田信之

凡　例

1、本書中における各遺構番号は、現地調査において用いたものをそのまま用い収録した。このため土坑、溝には欠番となるものがある。

2、遺構の挿図について

遺構挿図の縮尺は、下記の縮尺で掲載した。

	挿図縮尺	
住居址	1：80	
カマド	1：40	炉址は断面図のみ1：40を使用
館跡	1：240	断面図は1：60、1：120を使用
全測図	1：600	地形図に組み込まれる全測図は1：1000を使用。

土坑・溝・円形周溝・井戸は個々の挿図を割愛した。

住居址は代表的なもののみを掲載し、他は個々の挿図を割愛した。

○水糸の標高は、L：121.00ｍのように示した。

○等高線間隔は全測図で25㎝、館跡の堀の図面で20㎝である。

○挿図中に貼付されたスクリントーンは、焼土の分布・炉址を示す。

○挿図中に使用した北は座標北である。

3、遺物の挿図について

○縮尺は4分の1を原則とする。石製品は2分の1とする。

○挿図中に貼布されたスクリントーンは、灰釉部分を示す。

○遺物の番号については、現地作業において用いたものを改訂して収録した。このため現地作業の番号は遺物の一覧表の備考覧に収録した。

4、写真について

○遺物写真は原則として、遺構に伴って出土したものを掲載し、グリッド出土のものは割愛した。

○遺物写真横に付した番号は挿図中の番号と同じである。従って写真を割愛したものは欠番とした。

目　次

本　文　目　次

序文
例言
凡例
序章
第１節　調査に至る経過……1
第２節　位置と考古学的環境……3
第３節　調査の方法……4

第Ⅰ章　遺跡の立地……5
第Ⅱ章　調査の経過……5
第Ⅲ章　土層……6
第Ⅳ章　検出された遺構……7
第１節　弥生時代……7
２号住居址……7
第２節　古墳時代……8
第１項　住居址……8
32号住居址……8
35号住居址……9
20号住居址……10
23号住居址……11
27号住居址……12
14号住居址……13
３号住居址……14
第２項　館跡……15
第３項　円形周溝……16
第３節　奈良・平安時代……17
第１項　住居址……17
33号住居址……18
17号住居址……19
42号住居址……20
第２項　畑状遺構・水田址……20
第４節　中世……20
井戸……20
第５節　時代不明遺構……20
第１項　住居址……20
第２項　溝……21
第３項　土坑……21
第６節　トレンチにより確認された遺構……21
第１項　住居址……21
第２項　溝……21
第３項　土坑……21
第Ⅴ章　検出された遺物……25
第１節　縄文時代……25
第２節　弥生時代……26
第３節　古墳時代……26
第１項　住居址出土遺物……26
第２項　館跡出土遺物……26
第３項　円形周溝出土遺物……26
第４項　遺構外出土埴輪……34
第４節　奈良・平安時代……36
第５節　中世……38
第１項　井戸出土遺物……38
第２項　４号土坑出土遺物……38
第Ⅳ章　まとめ……39
あとがき　梅木遺跡の保存について……40
参考文献……42

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……２
第２図　標準堆積土層図……６
第３図　遺跡全測図・住居址
　　時代別分布図……折りこみ
第４図　２号住居址実測図……７
第５図　32号住居址実測図……８
第６図　35号住居址実測図……９
第７図　20号住居址実測図……10
第８図　23号住居址実測図……11
第９図　27号住居址実測図……12
第10図　14号住居址実測図……13
第11図　３号住居址実測図……14
第12図　館跡・堀断面実測図……15
第13図　館跡実測図……折りこみ
第14図　33号住居址実測図……17
第15図　17号住居址実測図……18
第16図　42号住居址実測図……19
第17図　遺構外出土遺物……25
第18図　２・９号住居址出土遺物……26
第19図　10・11・32・34・35
　　36・43号住居址出土遺物……27
第20図　44・46・48号住居址出土遺物…28
第21図　20・23号住居址出土遺物……29
第22図　27号住居址出土遺物……30
第23図　１・19・25・49・３号住居址
　　出土遺物……31
第24図　14号住居址出土遺物……32
第25図　カマド構築材埴輪・遺構外
　　出土埴輪……35
第26図　31・33号住居址出土遺物……36
第27図　12・13・17・21・26・28・29
　　30・50号住居址出土遺物……37

表　目　次

表１　柵列（柱穴）一覧表……16
表２　溝一覧表……21
表３　住居址一覧表（１）……22
表４　住居址一覧表（２）……23
表５　土坑一覧表……24
表６　10・11・32・34・35・36・43
　　44・46・48号住居址出土遺物
　　観察表……28
表７　20・23・27号住居址出土遺物
　　観察表……33
表８　１・19・25・49・３
　　14号住居址出土遺物観察表……34
表９　31・33号住居址出土遺物
　　観察表……36
表10　12・13・17・21・26・28・29
　　30・50号住居址出土遺物
　　観察表……38

図 版 目 次

図版１　1.遺跡の位置と周辺（航空写真）43
　　2.航空写真近景
図版２　1.Ｃトレンチ中央確認……44
　　2.Ａトレンチ中央確認
　　3.Ａ区東側確認
　　4.Ａ区西側確認
　　5.Ｆ区確認
図版３　1.２号住居址……45
　　2.10号住居址遺物出土状況
　　3.左11・右３号住居址
　　4.11号住居址炭化物出土状況
　　5.同遺物出土状況
　　6.32号住居址
　　7.44号住居址遺物出土状況
　　8.同
図版４　1.35号住居址遺物出土状況……46
　　2.同
　　3.同
　　4.同炭化物出土状況
　　5.左下18・右上20号住居址
図版５　1.23号住居址・柵列……47
　　2.27号住居址遺物出土状況
　　3.同
　　4.同
　　5.同
図版６　1.14号住居址遺物出土状況……48
　　2.14号住居址カマド
　　3.館跡、堀南側中央断面
　　4.同
　　5.同南東側隅角付近断面
　　6.館跡、堀・柵列
　　7.33号住居址カマド
　　8.31号住居址
図版７　1.30号住居址カマド……49
　　2.42号住居址カマド
　　3.17号住居址
　　4.17号住居址カマド
　　5.41号住居址
　　6.Ａ区東畑状遺構
　　7.Ｈ区トレンチ、水田址
　　8.２号井戸
図版８　1.Ｄ区全景……50
　　2.Ｆ区全景
図版９　９・10・11・35・20号住居址出土遺物……51
図版10　20・23・27号住居址出土遺物…52
図版11　27・14号住居址出土遺物……53
図版12　14・３・33・13・17・28・42号住居址出土遺物……54

序　　章

第１節　調査に至る経過

前橋市における新総合計画の中で住民全般の休息、観賞、散歩、遊戯、運動、学習に供する等のため大室公園構想が策定された。

本公園構想は、国指定史跡前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳、五料沼、雑木林を含み自然景観のよく残された地である。

規模として36.9ha、主要施設として博物館、赤城型民家（民俗資料の展示）の移築、古墳の保存地、ボート池（五料沼）、芝生広場、運動広場等が構想されている。

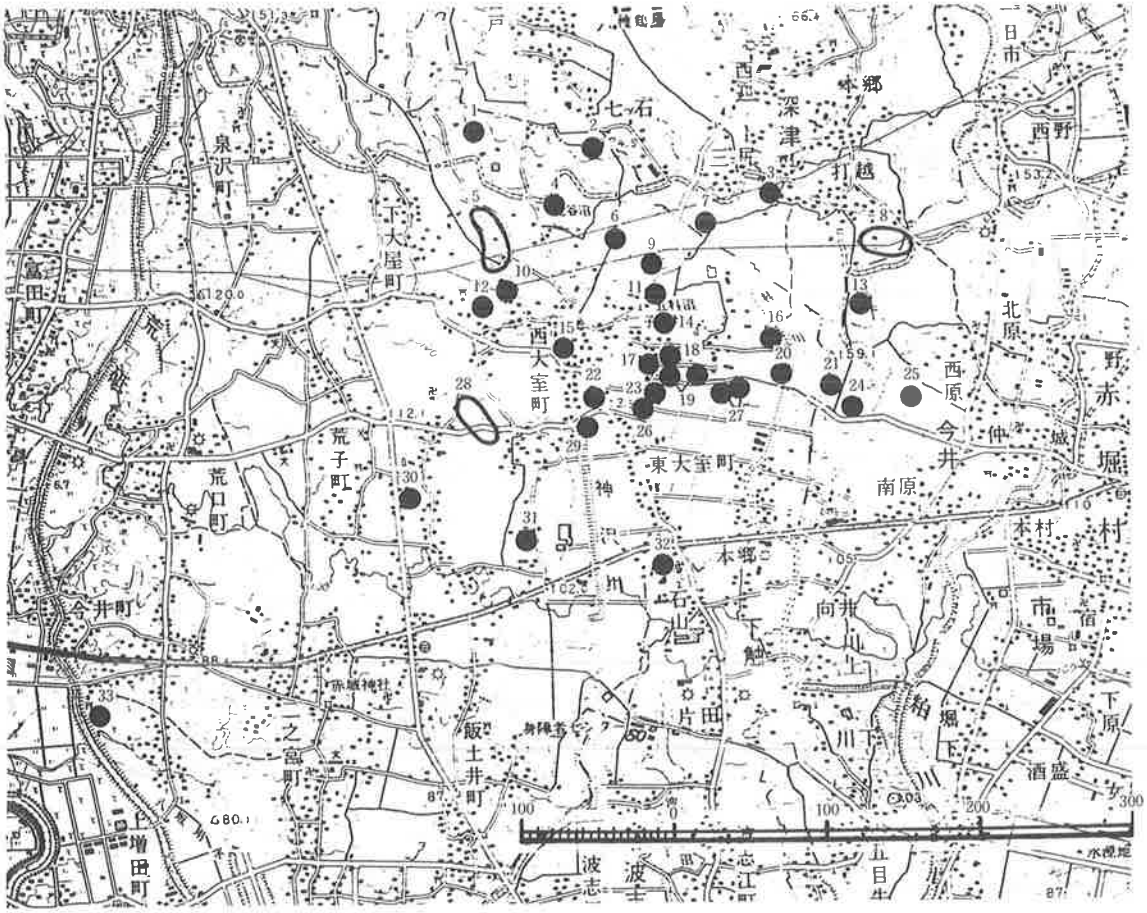
具体的な整備計画、年次については建設委員会等で十分協議し、基本設計に入り、基本設計を検討するなかで実施計画に入り具体的な整備方針、方法を決めていく計画である。

それに先だち本公園予定地内に所在する13戸の移転をする必要があり、特に、集団移転先約２haについて発掘調査を実施することになったものである。

調査対象地域は２haの内、家屋移転を直接する地域3,500㎡については発掘調査とする。残16,500㎡については、農家の庭、農地のままになるため確認調査をし遺跡の範囲、性格を明らかにすることになった。

本移転先の直接の地権者は、個人専用住宅であり、地権者個人の責任に帰するところであるが公園計画の中で集団移転をするものである。そのことから、土地そのものの権利者は個人であるが公共性が高いこともあって整地だけは前橋市で責任を持つことになった経緯があるものである。

そこで、公園緑地課と教育委員会での協議、調整会議をもち発掘調査、確認調査を実施することになった。



1	熊ノ穴遺跡	12	産泰神社	23	大室小校庭遺跡
2	巨石祭祀遺跡	13	赤掘茶臼山古墳	24	時里古墳と骨壺群
3	丸山古墳	14	中二子古墳	25	西原遺跡
4	製鉄遺跡	15	大室城跡	26	大室小校農場遺跡
5	大稲荷古墳群	16	梅木遺跡	27	荒砥五反田遺跡
6	西大室遺跡群第2次調査地	17	荒砥147号墳	28	阿久山古墳群
7	丸塚古墳	18	前二子古墳	29	牛島古墳
8	轟山古墳群	19	荒砥上諏訪遺跡	30	荒砥荒子遺跡
9	西大室遺跡群第3次調査地	20	上川久保遺跡	31	天神古墳
10	伊勢山古墳	21	多田山火葬墓群	32	下青竜古墳群
11	後二子古墳	22	大室石原遺跡	33	今井神社古墳

第1図　遺跡位置図

第２節　位置と考古学的環境

本遺跡は赤城山南麓、桂川右岸に位置する。

本遺跡の周辺は、古墳の密集地区であり、縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代の包蔵地としてよく知られている。近年本遺跡の周辺は西大室遺跡群として、数次に渡り調査が行なわれている。その主な遺構・遺物を含めて時代別に概観する。

縄文時代

西大室遺跡群２・３次調査で住居址が検出されている。３次調査で検出された住居址は諸磯ｂ式期である。

遺物は早期後半から後期にかけての土器片が検出されている。

弥生時代

西大室遺跡群３・５次調査で、周溝墓・住居址が検出されている。

遺物は樽式・赤井戸式それぞれが検出され、両形式の土器分布の接点とも思われる。この中には樽式と古式土師器、赤井戸式と古式土師器がセットで検出された遺構もあり、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての複雑な様相が認められる。

古墳時代

古墳は大室地区で178基、旧荒砥地区全体では365基が上毛古墳綜覧に記載されている。又本遺跡の東側の赤堀村も、赤堀茶臼山古墳（13）を初めとする、古墳の密集地である。

これらの古墳は、古式のものは少なく、６世紀以降のものが多い。

本遺跡の周辺には前二子古墳（18）、中二子古墳（14）、後二子古墳（11）があり、本遺跡検出の館跡との関連が考えられる。なお荒砥荒子遺跡（30）では、本遺跡の館跡と近似した遺構が検出されている。

西大室遺跡群の調査でも古墳の調査例は多い。住居址も数多く検出されている。４次の調査は梅木地区（本遺跡と道路を狭んだ南側）であり、前期４軒、中期２軒、後期前半18軒の住居址が検出されている。

遺構・遺物とも本遺跡周辺は古墳時代のものが最も多い。特に埴輪の出土が多く、消滅してしまった古墳もあったと思われる。

奈良・平安時代

住居址は前代に引き続き数多く検出されている。又浅間Ｂ軽石により埋没した水田が検出されている。

中・近世

大室城址（15）が存在する。西大室遺跡群の調査では中世墓坑、井戸が検出されており、板碑片、五輪塔などが出土している。

本遺跡はこのような考古学的環境に位置している。

第３節　調査の方法

調査に先だって調査区及びその周辺の地形測量を行なった。

調査対象面積は20,000㎡で、まず確認調査を行なった。東西に２ｍ幅のトレンチ３本を設定し、約10％の調査を行なった。なお西側の一部は作物の収穫の関係で、調査を行なえない部分が生じた。

トレンチ調査により確認された遺構は本調査区域（住宅が直接建てられる部分）外のものは、掘り下げを行なわなかった。

本調査部分は８ヶ所に分かれ、便宜上表上排土順にＡ・Ｂ・Ｃ……Ｈ区とした。Ｈ区は上記の作物の関係で、トレンチによる調査となり、約26％の調査を行なった。

本調査面積は3,500㎡が対象であったが、確認トレンチにまたがる部分や拡張部分を含めて、結局4,100㎡の調査を行なった。

グリットは公共座標にあわせて、南北にＡ・Ｂ・Ｃ……、東西に１・２・３……、とし（Ｄ－24）グリットのようにした。

各遺構の調査は土層観察のためのベルトを残して掘り下げ、調査の各段階で図面を作成し、写真撮影を行なった。

実測図は地形測量図を500分の１、全体測量を200分の１でとった。

各遺構は20分の１の縮尺で実測し、必要に応じて10分の１、40分の１も併用した。

写真の撮影は大型白黒カメラ、小型白黒カメラ、スライド用小型カメラの３台で撮影を行なった。

以下各遺構別に調査方法を記載する。

竪穴住居址　十字又は１本のベルトを残して掘り下げ、充填土の観察をした。遺物は床着、床密着、カマド、炉址出土のものは原則としてその出土地点を記し、覆土中のものは一括して取り上げた。実測図は20分の１で作成した。カマドは10分の１で実測した。

土坑　半截して充填土の観察をし、20分の１で実測した。

館跡　堀　南側は任意にベルトを残して掘り下げを行ない40分の１で実測した。

柵列　半截して掘り下げ、柱痕が見られないものはそのまま全掘し、40分の１で実測した。

溝　任意にベルトを設定し40分の１で実測した。

井戸　半截可能な面まで土層の観察をし、20分の１で実測した。

昭和61年の調査は、館跡の堀と柵列の隅角部分の確認のために行なったものである。表土排土後、確認精査を行ない、範囲を確認した。その後任意にトレンチを設定し、掘り下げを行ない、堀の隅角部分を確定した。

第Ⅰ章　遺跡の立地

本遺跡は赤城山南麓に位置する。東に桂川、西に神沢川が流れる。遺跡は桂川に近接し、桂川による開析、氾濫を受け、関東ローム層が見られず、沖積層が形成され、粘土層や砂礫層が堆積している。標高は121ｍ前後である。遺跡の地目は桑畑である。桂川との比高は４ｍ前後、北東側水田面との比高は２ｍ前後である。

第Ⅱ章　調査の経過

調査は昭和60年８月20日に開始し、60年12月27日に終了した。その後堀の隅角部分の確認のため、昭和61年２月３日から２月８日まで調査を行なった。

以下日誌抄

昭和60年

８月20日～８月27日　草刈作業を行なう。桑が２ｍ前後に伸びており、蜂などの虫類も多く、作業難行する。

８月24日～８月27日　地形測量を行なう。

８月28日～９月３日　２ｍ幅のトレンチ３本を東西方向に設定し、掘削を開始する。西側の一部は未開放のためトレンチ調査を行なわなかった。

８月28日～９月３日　作業員が入り、トレンチ精査を行なう。各トレンチより遺構・遺物が検出された。

９月３日～９月20日　本調査部分の掘削開始。

９月９日～10月３日　本調査部分の確認精査。作業員の人数が少ないため、作業が遅れている。確認面は東側が灰褐色砂層、西側は礫まじりの暗褐色土である。住居址・土坑・溝を確認する。遺構は東側に多く集まる、遺物は古墳時代のものと平安時代のものが多い。他に縄文土器片、埴輪片なども出土した。

10月７日　遺構の掘り下げ開始。東側のＡ区、Ｆ区より開始する。

10月21日　30号住居址のカマドの調査を行なう。破砕した埴輪片が多数検出された。埴輪をカマドの構築材としていたと思われる。

10月23日　円形周溝の調査を終了する。周溝は全周せず、主体部と思われる土坑も検出されなかった。

10月25日　27号位居址の調査を終了する。覆土上層には灰褐色砂層が見られ、その下層から柱穴列が検出された。

10月29日　１号溝（堀）の掘り下げを開始する。

11月11日　柱穴列（柵列）の調査を終了する。検出された部分では１号溝（掘）と平行に走り、同一遺構の可能性強い。

11月12日　１号溝下部に堆積していた火山灰はＦＡ層（ニッ岳降下の火山灰）であることが確実となる（群馬大学新井房夫教授の御教示による）。

11月14日　２・９号住居址の調査を行なう。共に覆土中にＣ軽石（浅間山降下）を含むことから弥生時代の住居址と考えられる。

12月２日　未開放地であった西側調査区域が開放になり、トレンチによる調査を行なう。その結果Ｂ軽石層下より水田址を検出した。

12月13日　１号溝（堀）以外の遺構の掘り下げを終了し、１号溝（堀）の掘り下げを中心に行なう。

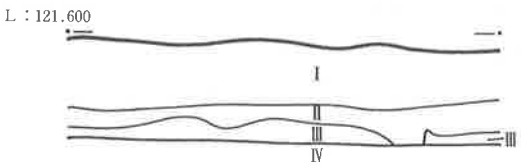
12月27　60年の調査終了。堀の隅角部分に不明な点を残す。

昭和61年

２月３日～２月８日　堀と柱穴列（柵列）の隅角部分の確認を行なう。表土排土後、確認精査を行ない、範囲を確認した。その後任意にトレンチを設定し、掘り下げを行ない、堀の隅角部分を確定した。

第Ⅲ章　土　　層（第２図）

本遺跡は桂川によって氾濫を受け、沖積層が形成されている。このため土層の堆積状況は、遺跡内においても、違いが認められる。ここでは遺構が多く検出された東側中央部の堆積を掲載した。



第２図　標準堆積土層図

Ⅰ層　暗褐色土　表土。

Ⅱ層　黒褐色土　Ｃ軽石を少量含む。しまりややあり、粘性あまりない。

Ⅲ層　暗褐色土　砂質層。確認面はこの層中である。

Ⅳ層　灰褐色土　砂層。桂川の氾濫により堆積した層。

なお西側はⅢ、Ⅳ層は観察されず、礫まじりの暗褐色土となる。又Ⅱ層とⅢ層の間にＢ軽石層が検出された所もある。

第Ⅴ章　検出された遺構

第１節　弥生時代

住居址　（第３図　　表３）

本遺跡検出の弥生時代の遺構は２・９号住居址の２軒である。いずれも調査区東側に位置する。プランは２軒共隅丸方形を呈し、覆土中に浅間Ｃ軽石を多量に含む。主軸方向はほぼ同じである。

２号住居址　（第４図　　**図版**３－１　表３）

本址は調査区北東側に位置する。東側で１号住居址と重複し、本址の方が古い。東側には桂川が近接している。

確認面は灰褐色砂層で、床面も同様である。確認面からの掘り込みは25㎝である。

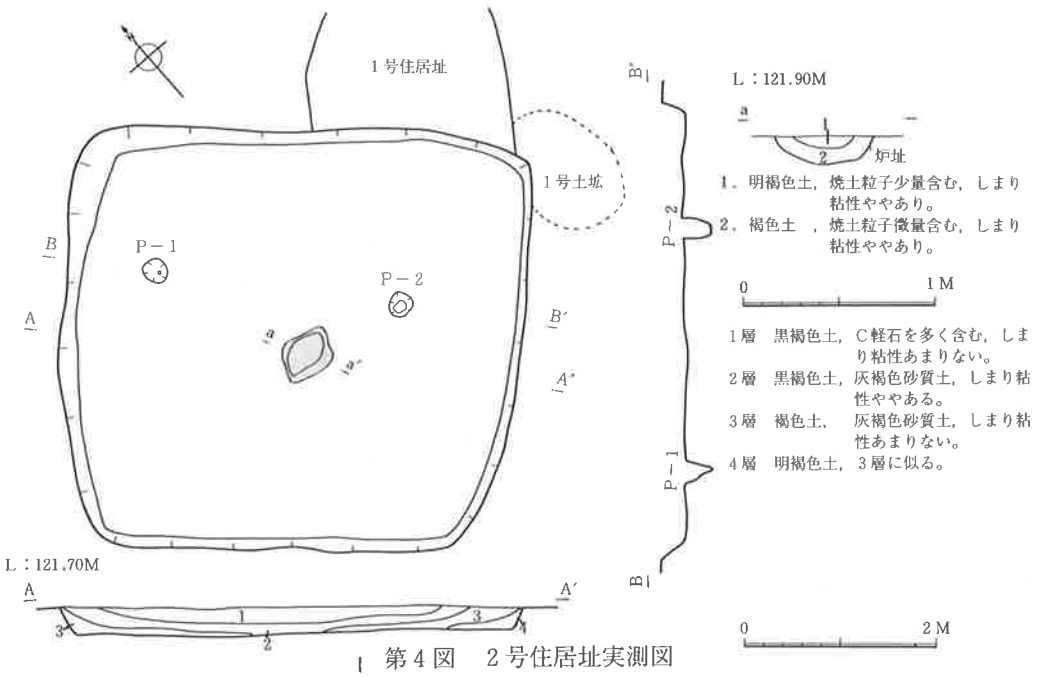
壁はなだらかに立ち上がり、床面はほぼ平坦で、踏み固めがやや見られる。

覆土は４層に分けられ、自然堆積を示す。１層はＣ軽石を多量に含む。

ピットは２基検出された。Ｐ－１・Ｐ－２共に25㎝前後の掘り込みで、Ｐ－１は底部に行くにしたがって細くなる。

炉址は本址中央に位置する。覆土は焼土粒子を少量含む。

遺物は覆土中から少量出土している。



第４図　２号住居址実測図

第２節　古墳時代

本遺跡検出の古墳時代の遺構は住居址22軒、柵列と堀で構成される館跡１軒、円形周溝１基である。

第１項　住居址　（第３図　　表３・４）

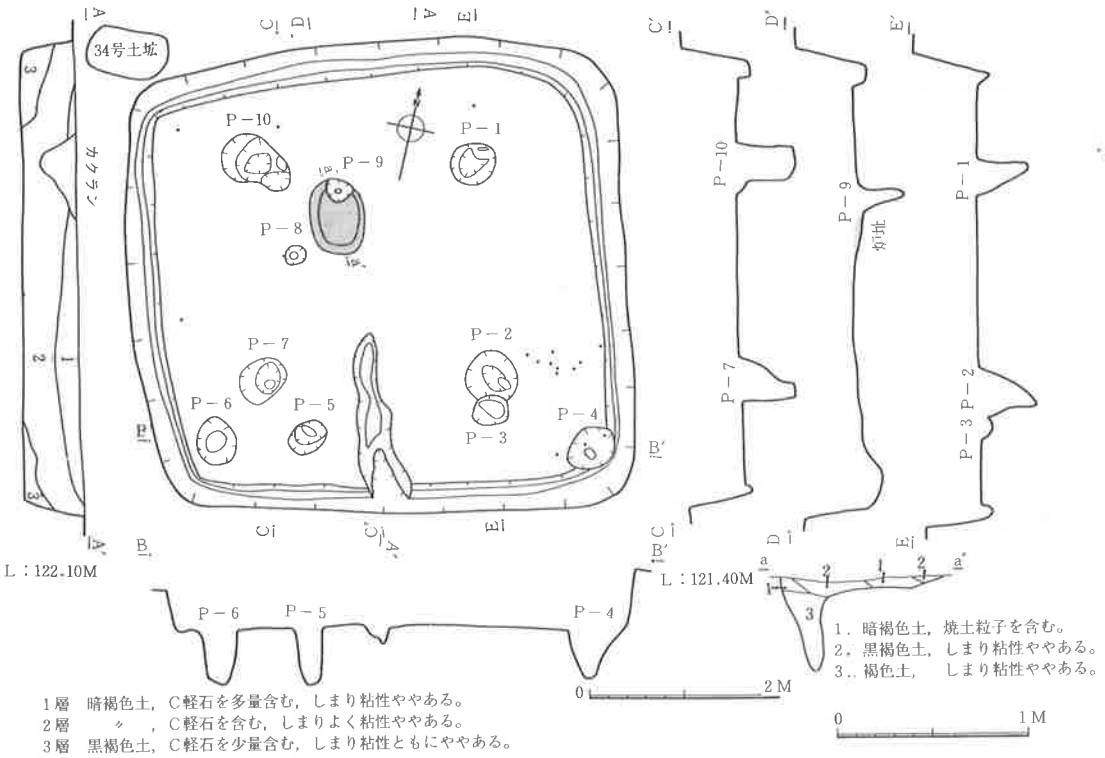
本遺跡検出の古墳時代の住居址は22軒で、前期と中期に分かれる。前期の住居址は10・11・18・32・34・35・36・43・44・46・48号の11軒で、調査区全体に分布する。中期の住居址は１・３・５・８・14・20・23・25・27号の９軒で調査区東側に分布する。その内３・14号住居址はカマドを有し、中期から後期への移行期のものである。他に古墳時代の住居址ではあるが、遺物が僅少なため細分ができない住居址（19・49号住居址）が２軒ある。

32号住居址　（第５図　　**図版**３－６　表４）

本址は調査区南側中央に位置する。

確認面は灰褐色砂層である。灰褐色砂層は本址より東側で検出され、西側では検出されていない。確認面からの掘り込みは60㎝である。

プランは方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、全体に踏み固めがやや見られる。



1層　暗褐色土，C軽石を多量含む，しまり粘性ややある。
2層　〃　，C軽石を含む，しまりよく粘性ややある。
3層　黒褐色土，C軽石を少量含む，しまり粘性ともにややある。

第５図　32号住居址実測図

覆土は3層に分けられ、自然堆積を示す。層中にはいずれもC軽石を含み、しまりが良い。

ピットは8基検出されている。P－1・P－2・P－7・P－10が主柱穴と思われ、P－4・P－6は壁際にあり、貯蔵穴の可能性もある。南側中央には間仕切状の溝が検出された。周溝はほぼ全周する。

炉址は中央やや北寄りで検出された。覆土は若干の焼土粒子を含む。

遺物は少量床着状態で出土している。

35号住居址　（第6図　　**図版**4－1～4　表4）

本址は調査区中央南側に位置する。東側で33号住居址と重複し、本址の方が古い。

確認面は礫まじりの暗褐色土である。確認面からの掘り込みは50㎝である。

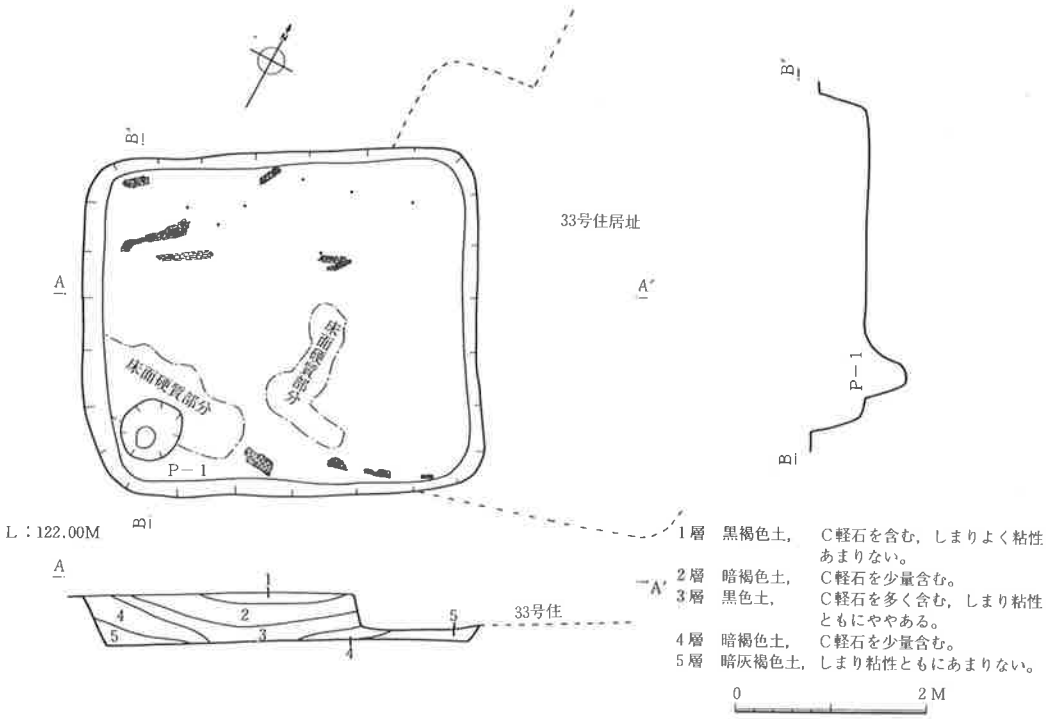
プランは方形で、壁はやや外反して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、所々によく踏み固めた部分が検出されている。

覆土は5層に分層され、1層から4層まではC軽石を含む。

ピットは1基検出されている。南西側壁際にあり貯蔵穴状のものかも知れない。

炉址・周溝は検出されなかった。

遺物は坩・台付甕・小形甕がほぼ完形で出土している。炭化物も検出されているが、火災住居址とは考えられない。



第6図　35号住居址実測図

20号住居址・柵列　（第７図　　**図版**４－５　表３）

本址は調査区北東側で検出された。北側と西側の一部が調査区外となり、中央部は３・４号溝によって壊されている。東側では18号住居址と重複し、本址の方が新しい。

確認面は灰褐色砂層であるが、この付近は礫を多く含んでいる。

プランは方形を呈すると思われ、壁はやや外反して立ち上がる。床面は中央がやや浅くなり、踏み固めが全体に見られる。

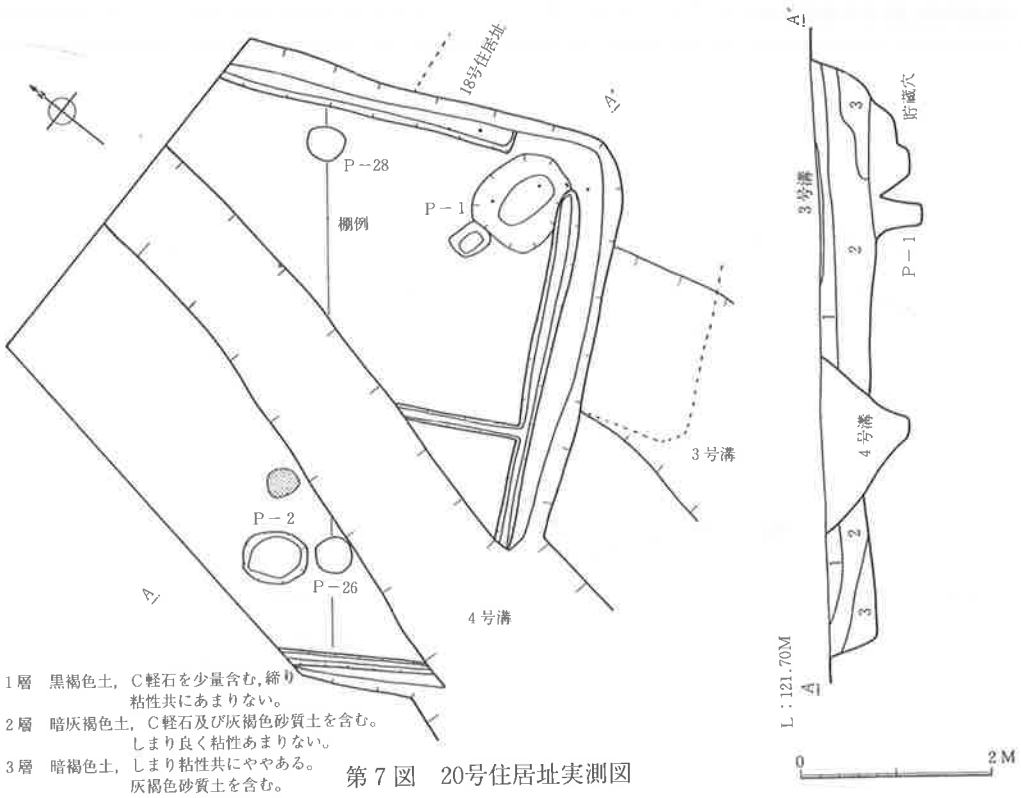
覆土は３層に分けられ、自然堆積を示す。

ピットは２基検出されている。北東側壁際には貯蔵穴がある。周溝は調査した部分ではほぼ全周する。本址南側には間仕切状の溝が検出された。

炉址は調査部分では検出されていないが、焼土の分布が見られる。

遺物は比較的多く検出されている。

柵列は20号住居址内でＰ－26とＰ－28の２基が検出されている。確認面では３・４号溝のため確認できなかった。覆土は挙大の礫を多く含む。なお１基（Ｐ－27）は４号溝構築時に消滅してしまったものと思われる。



１層　黒褐色土，Ｃ軽石を少量含む，締り粘性共にあまりない。
２層　暗灰褐色土，Ｃ軽石及び灰褐色砂質土を含む。しまり良く粘性あまりない。
３層　暗褐色土，しまり粘性共にややある。灰褐色砂質土を含む。

第７図　20号住居址実測図

23号住居址・柵列　（第８図　　**図版**５－１　表３）

本址は調査区北東側で検出された。北側の一部が調査区外となっている。

確認面は灰褐色砂層である。

プランは方形を呈すると思われ、壁はやや外反して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、全体に踏み固めが見られる。

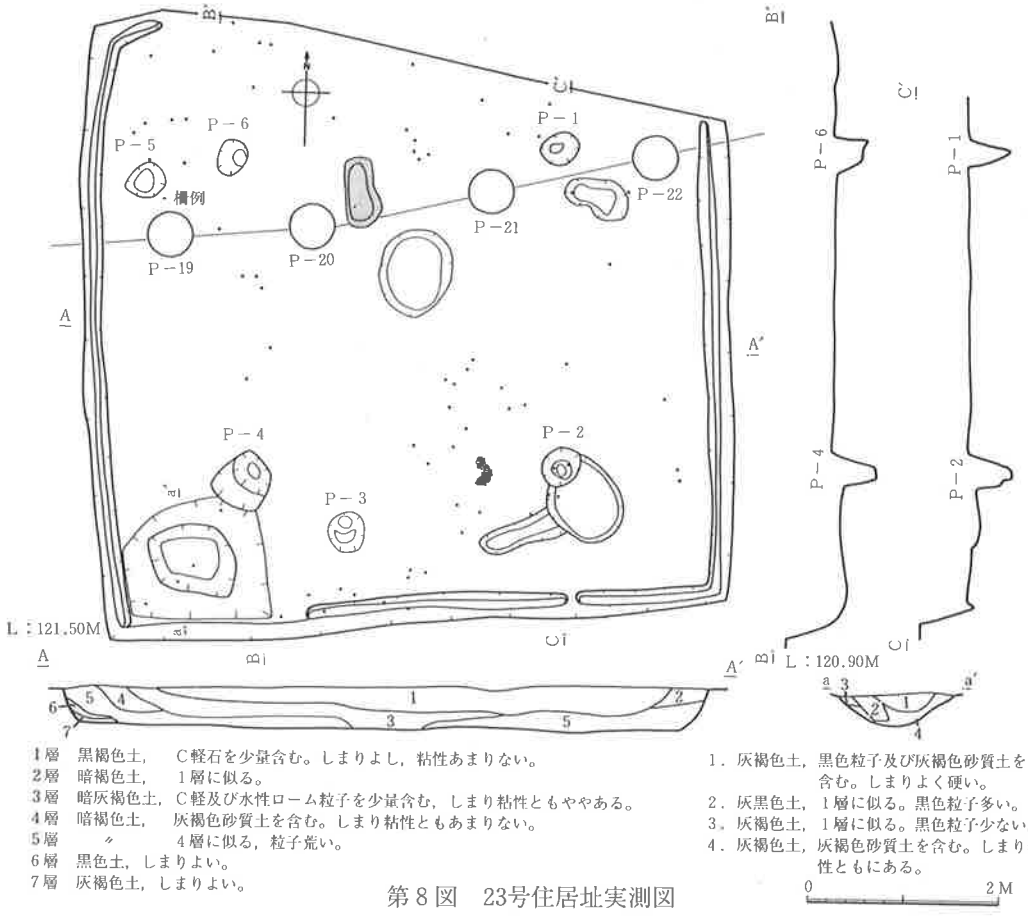
覆土は７層に分層され、自然堆積を示す。

ピットは６基検出されているが、Ｐ－１・Ｐ－２・Ｐ－３・Ｐ－６が主柱穴と思われる。南西側壁際には貯蔵穴が存在する。周溝は調査した部分ではほぼ全周する。

炉址は本址中央、北寄で検出された。浅い掘り込みである。

遺物は覆土・床着共に多く出土している。

柵列は23号住居址の確認面で４基のピットが検出されている。覆土は23号住居址の覆土よりもしまりが良い。



1層　黒褐色土，　Ｃ軽石を少量含む。しまりよし，粘性あまりない。
2層　暗褐色土，　１層に似る。
3層　暗灰褐色土，Ｃ軽及び水性ローム粒子を少量含む，しまり粘性ともややある。
4層　暗褐色土，　灰褐色砂質土を含む。しまり粘性ともあまりない。
5層　〃　　４層に似る，粒子荒い。
6層　黒色土，しまりよい。
7層　灰褐色土，しまりよい。

1．灰褐色土，黒色粒子及び灰褐色砂質土を含む。しまりよく硬い。
2．灰黒色土，１層に似る。黒色粒子多い。
3．灰褐色土，１層に似る。黒色粒子少ない。
4．灰褐色土，灰褐色砂質土を含む。しまり粘性ともにある。

0　2M

第８図　23号住居址実測図

27号住居址・柵列　（第９図　　**図版**５－２～５　表４）

調査区北東側で検出された。主軸の方向は20・23号住居址とほぼ同一方向で館跡の堀や柵列と大体同じである。

確認面は灰褐色砂層である。

プランは方形を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。床面は中央に向かってやや傾斜し、踏み固めがやや見られる。

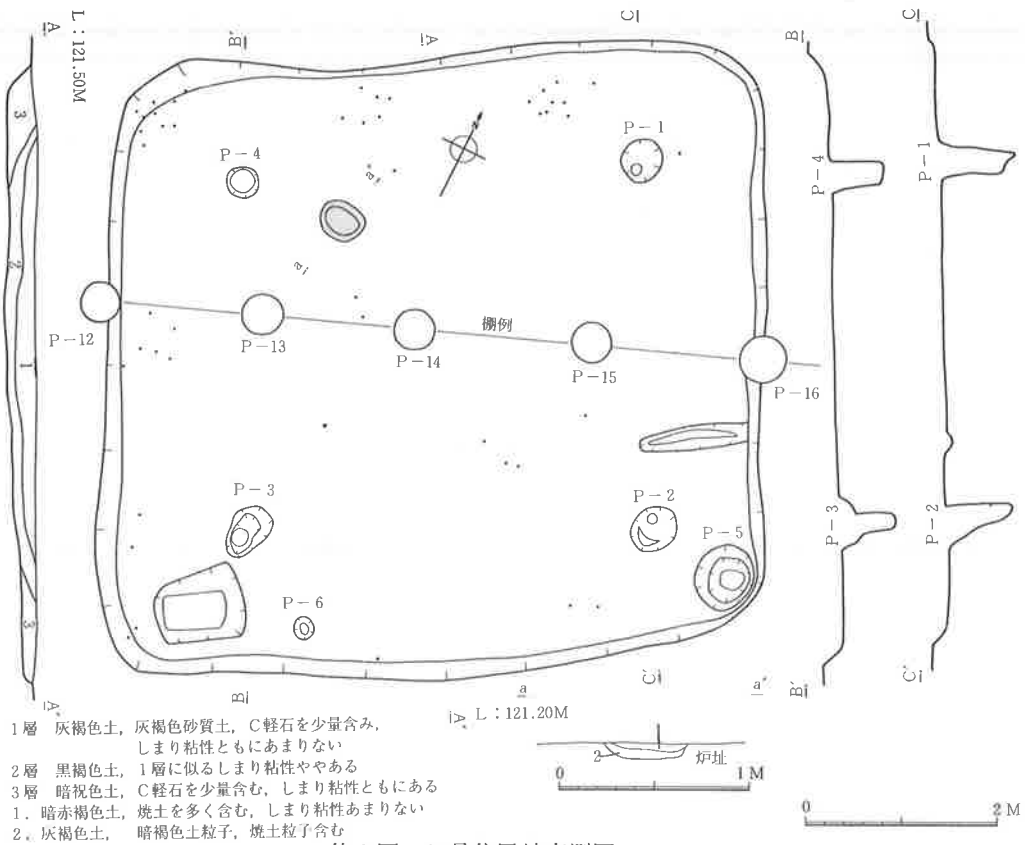
覆土は３層に分けられ、自然堆積を示す。

ピットは６基検出されているが、Ｐ－１からＰ－４までが主柱穴と思われる。貯蔵穴は南西側隅角で検出された。東側には間仕切状の溝が存在する。周溝はない。

炉址は本址中央、北東寄りで検出された。浅い掘り込みである。

遺物は多く出土しているが、特に北西側隅角に集中する。

柵列はＰ－12からＰ－16までの５基が27号住居址内で確認された。確認面では、はっきりしないものが多かった。



1層　灰褐色土，灰褐色砂質土，Ｃ軽石を少量含み，しまり粘性ともにあまりない
2層　黒褐色土，１層に似るしまり粘性ややある
3層　暗祝色土，Ｃ軽石を少量含む，しまり粘性ともにある
1．暗赤褐色土，焼土を多く含む，しまり粘性あまりない
2．灰褐色土，　暗褐色土粒子，焼土粒子含む

第９図　27号住居址実測図

14号住居址　（第10図　　**図版**６－１・２　表３）

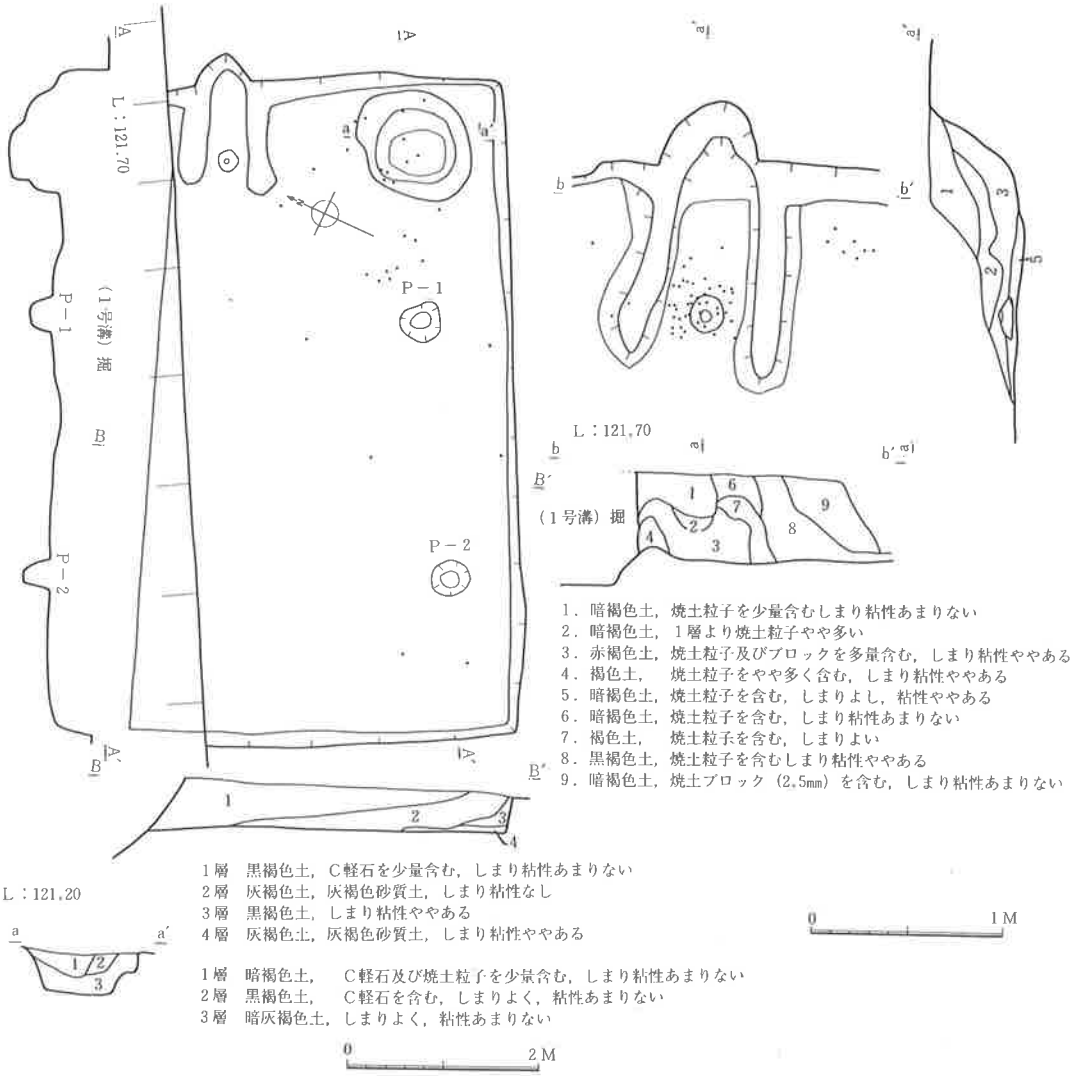
本址は調査区東側に位置する。北側は館跡の堀によって壊されている。

確認面は灰褐色砂層である。

プランは方形を呈すると思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は南側がやや高くなっており、踏み固めはカマド周辺に見られる。

覆土は４層に分層され自然堆積を示す。

ピットは２基検出されているが、いずれも30cm前後の掘り込みである。貯蔵穴は南東側隅角に位置する。周溝はない。



第10図　14号住居址実測図

カマド　東壁中央に位置する。袖は粘土で作られ、１ｍ程住居址内に張り出している。煙道は半円形の掘り込みで、30㎝程壁を掘り込んでおり、なだらかに立ち上がる。支脚は高坏を利用しており、伏せて使用していた。火床部は良く焼けている。

遺物はカマド、及び貯蔵穴周辺から多く出土している。

３号住居址　（第11図　表３）

本址は調査区東側に位置する。南東側で９号住居址、北西側で11号住居址と重複し、いずれも本址の方が新しい。

確認面は灰褐色砂層であるが、攪乱が激しい。

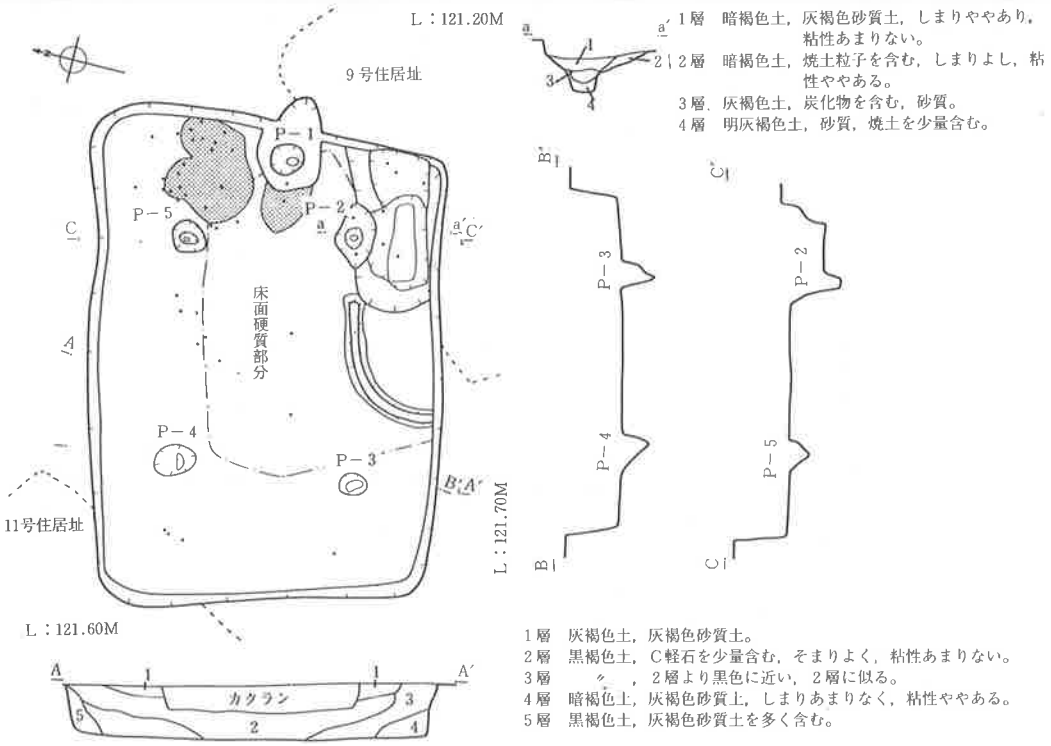
プランは方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、踏み固めは全体に見られ、中央から南東側にかけて特に顕著である。

覆土は５層に分層され自然堆積を示す。

ピットは５基検出され、Ｐ－２からＰ－５までが主柱穴と思われる。南東側隅角には貯蔵穴があり、南側にはＬ字状の高まりがある。

カマド　東壁中央に位置する。上部は攪乱のため不明であったが、煙道の掘り込み、及びわずかに残る粘土の袖が検出された。

遺物は南東側にやや多く集まる。



第11図　３号住居址実測図　0　2M

第２項　館跡　（第12・13図　　**図版**６－３～６　８－２　表１）

館跡と思われる遺構は、調査区東側で検出された。堀と柵列により方形に区画されるものと思われる。

検出された部分は南側の堀と柵列、及び西側の一部である。南西側隅角部分は、後の攪乱（桂川による氾濫と思われる。）により、不明な点が多いが、北に曲がる部分が確認され、ほぼ範囲がつかめた。一辺は外側で約85ｍ、内側で約65ｍである。

堀の幅は４ｍから6.6ｍで、東側が狭くなる。深さは１ｍから１ｍ20cm前後である。確認面は灰褐色砂質土である。断面形は逆台形を呈すると思われるが、地山が砂礫層であるため、壁が一部くずれ、皿状を呈する所がある。

土層は南側中央西より観察した。１～３層はＢ軽石層であるが灰層は検出されていない。11層はＦＡ層である。この堆積状態は南西側隅角付近を除いてほぼ同様である。南西側隅角部分は粘土と砂礫層の互層であった。北東側の隅角部分には、中央底部に水流の跡と思われる砂層が検出されている。

南西側隅角部分が不明なため、張り出しがあったかどうか不明である。

この堀は古墳時代中期末のカマドを有する14号住居址を切って構築され、後に国分期の住居址が掘り込まれている。

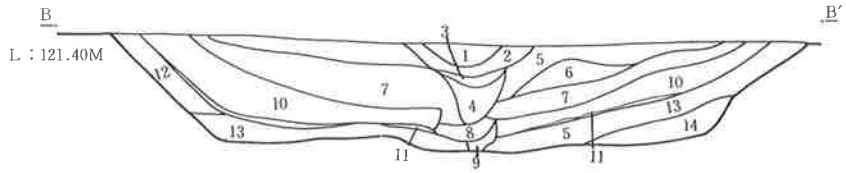
柵列は堀と平行して検出された。堀の内側との距離は３ｍから６ｍである。南側の堀と柵列との距離は５ｍ前後である。柱穴の間隔は1.8ｍ前後のものが多い。

覆土は全体にしまりが良いものが多い。

柵列は古墳時代中期後半と思われる20・23・27号住居址を切って構築されている。

遺物は堀の覆土から細片が出土している。ほとんどが土師器片で、埴輪片も含まれている。柵列からは坩がＰ－15から出土している。

今回の調査では、堀と柵列以外に館跡に併う遺構は検出されなかった。北側は水田になっているが、調査区との比高は２ｍあり、内部はほとんど残っていないと思われる。



１層	灰褐色土，	Ｂ軽石層。	８層	層灰褐色土，	砂層と粘土まじる，しまりあまりない。
２層	灰褐色土，	純砂層。	９層	層暗灰褐色土，	８層に黒色土まじる，しまりない。
３層	白灰褐色土，砂層。		10層	黒色土，	ＦＰを含む，しまりよい。
４層	暗茶褐色土，粘土層。		11層	赤褐色土，	ＦＡ層。
５層	暗褐色土，	砂質層。	12層	暗褐色土，	灰褐色砂質土を多く含む。
６層	灰褐色土，	砂質層，しまりよい。	13層	灰茶褐色土，	鉄分含む，しまりよい。
７層	暗褐色土，	粘土質層，しまりよい。	14層	灰褐色土，	しまりよい。

第12図館跡実測図

表１　柵列(柱穴)一覧表

柱穴番号	確認面直径(cm)	深さ(cm)	覆土の状態	掘り方の特徴	柱穴の間隔(cm)	備　　考
1	39	―	―	―	1と2　220	確認のみ。
2	35	59	黄色みを帯びた灰褐色砂質土		2と3　180	
3	34	―	―	―	3と4　190	確認のみ。
4	38	―	―	―	4と5　170	〃
5	37	―	―	―	5と6　180	〃
6	37	―	―	―	6と7　230	〃
7	33	―	―	―	7と8　200	確認のみ。南西側コーナーに位置する。
8	42	62	赤みを帯びた灰褐色土		8と9　190	
9	38	54	〃	2段の掘り込み	9と10　170	
10	44	64	〃	2段の掘り込み	10と11　160	
11	42	66	〃		11と12　190	2号土坑に切られる。
12	44	72	〃		12と13　175	
13	44	27号住居址床面から38	〃		13と14　165	27号住居址を切って構築。
14	42	〃　52	〃		14と15　190	〃
15	44	〃　60	〃		15と16　160	〃
16	50	46	黄色みを帯びた灰褐色砂質土		16と17　180	
17	31	50	〃		17と18　180	
18	42	58	〃		18と19　220	
19	46	27号住居址確認面から52	〃	2段の掘り込み	19と20　160	23号住居址を切って構築。
20	48	〃　53	〃	2段の掘り込み	20と21　195	〃
21	46	〃　58	〃	2段の掘り込み	21と22　185	〃
22	46	〃　75	〃	2段の掘り込み	22～26　700	〃
23	有無のみ確認	―	―	―		確認のみ。
24	〃	―	―	―		〃
25	〃	―	―	―		〃
26	40	20号住居址床面から22cm	拳大の礫多く含む		26と28　420	20号住居址を切って構築。
27	―	―	―	―		4号溝に切られたと思われる。
28	38	20号住居址床面から14cm	拳大の礫多く含む		28と29　180	
29	38	88	拳大の礫多く含む	2段の掘り込み	29と30　210	
30	48	―	拳大の礫多く含む	―	30と31　970	半分調査区外のため深さ、掘り方不明。
31	41	―	―	―	31と32　185	確認のみ。
32	34	―	―	―	32と33　160	〃　北東側コーナーに位置する。
33	38	―	暗い灰褐色砂質土	柱痕残る		

第３項　円形周溝　（第３図）

調査区北側中央Ｄ－26グリット付近で検出された。確認面は灰褐色砂質土上面である。

同溝は北側を欠く半円形である。

周溝の幅は東側で58cm、南側で56cm、西側の一番広い部分で160cmである。周溝部を含めた大きさは9.8ｍである。深さは南側の最深部で38cmである。断面形はＵ字形を呈し、西側は皿状となる。

覆土はＣ軽石をやや多く含む黒褐色土を基調とし、自然堆積を示す。

主体部と思われる土坑は検出されなかった。

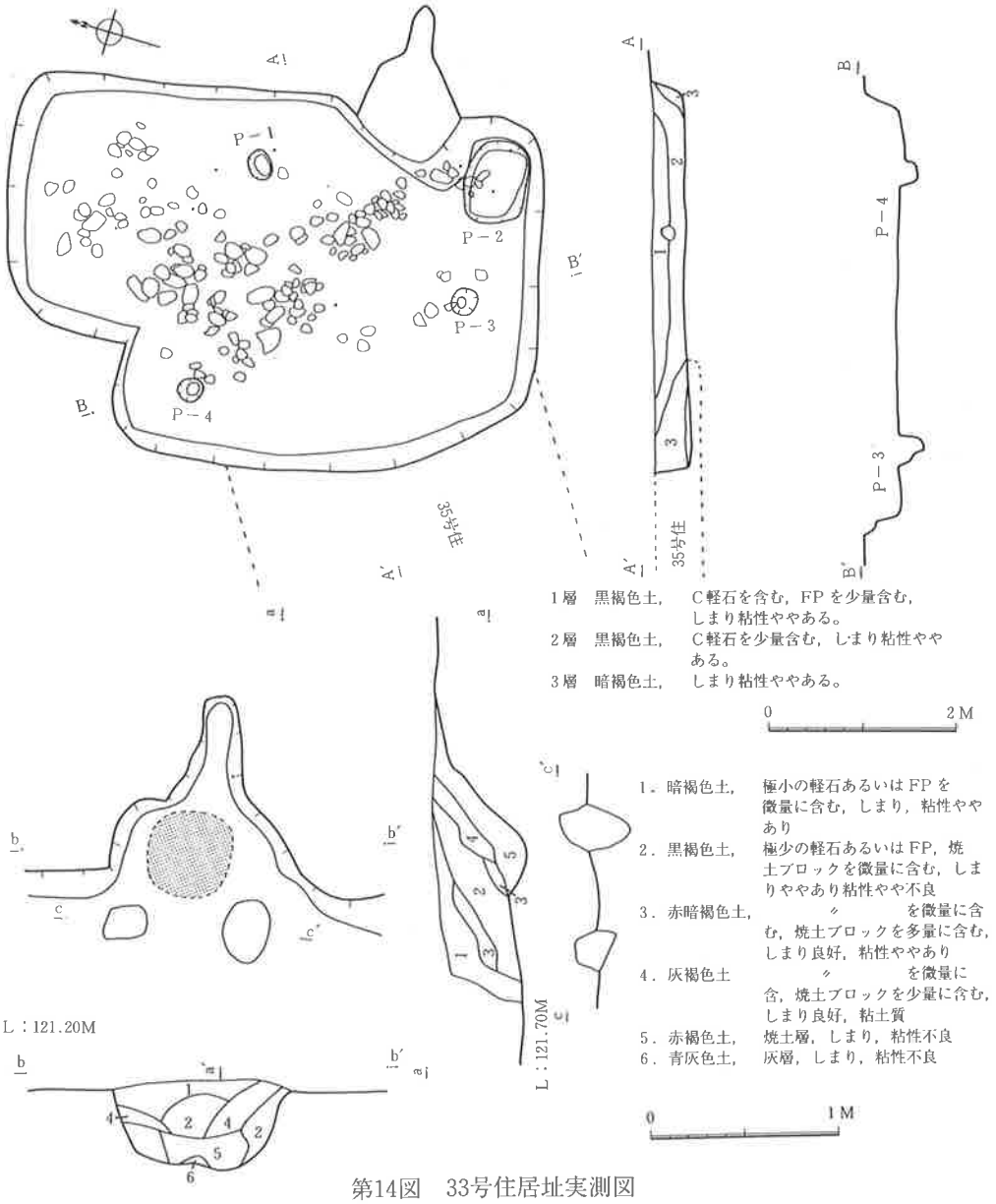
遺物は覆土中から少量出土している。

第３節　奈良・平安時代

本遺跡で検出された奈良・平安時代の遺構は、住居址16軒と、浅間Ｂ軽石下の畑状遺構及び水田址である。

第１項　住居址　（第３図　表３・４）

奈良時代２軒、平安時代14軒が検出されている。奈良時代の住居址は31・33号住居址の２軒で調査区中央南に位置する。平安時代の住居址は12・13・17・21・26・28・29・30・37・38・39・42・47・50号住居址の14軒で調査区全体に分布する。



第14図　33号住居址実測図

33号住居址　（第14図　　**図版**６－７　表４）

本址は調査区中央南側に位置し、西側で35号住居址と重複し本址の方が新しい。

確認面は礫を少量含む暗褐色土層上面である。

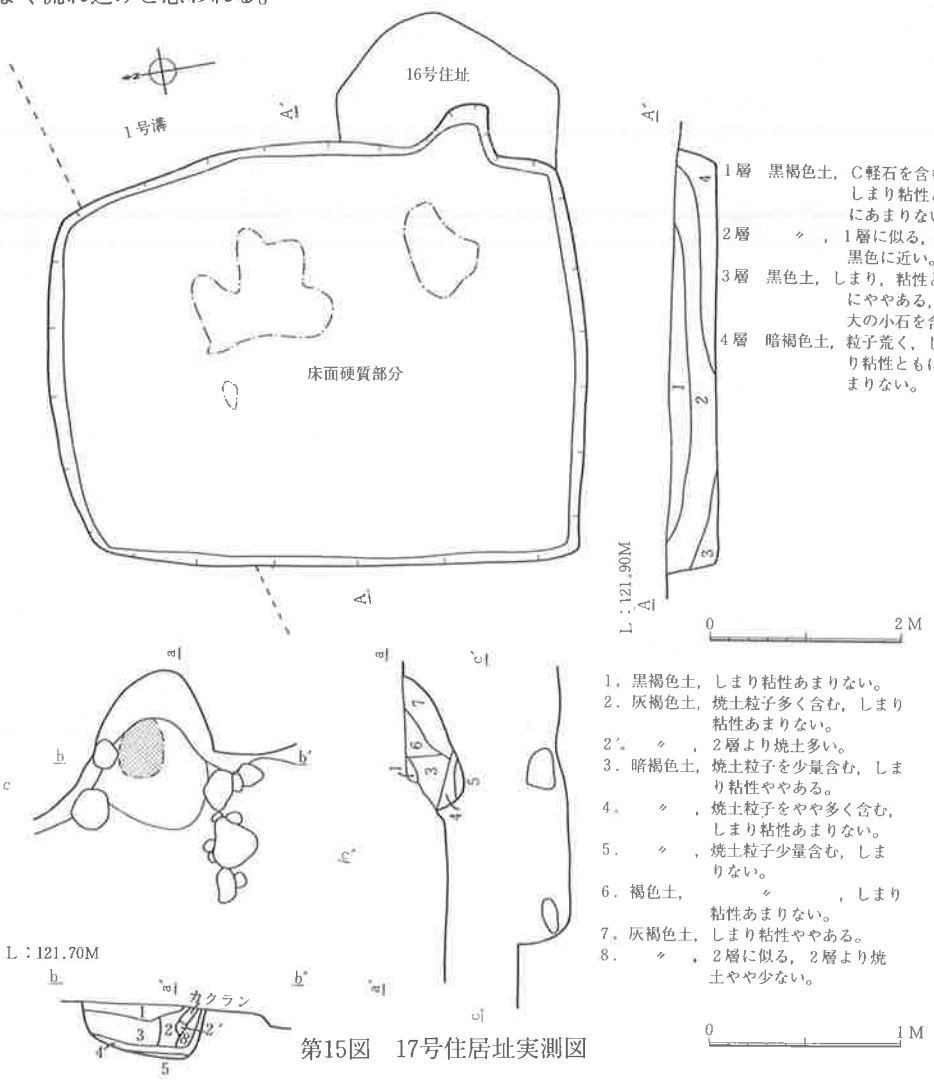
プランは北側が一部張り出す不整形である。壁はなだらかに立ち上がる。床面はほぼ平坦で、踏み固めが見られる。西側の35号住居址と重複する部分は貼り床となっている。

覆土は貼り床を除いて３層に分けられ、自然堆積を示すものと思われる。１層と２層は挙大の石を混入し、色調の変化も乏しいことから同時堆積の可能性もある。

ピットは３基検出されているがいずれも浅い。貯蔵穴は南東側隅角にある。

カマド　東壁中央やや南寄りに位置する。袖石は砂質凝灰岩を用いている。煙道は長く、壁外に伸びる。火床部はよく焼けており、覆土中には焼土粒子を多く含む。

遺物は少量出土している。他に１層を中心として挙大の石が多量に混入していた。床着のものはなく流れ込みと思われる。



第15図　17号住居址実測図

17号住居址　（第15図　　**図版**７－３・４　表３）

本址は調査区北東側で検出された。館跡の堀を壊して構築されている。

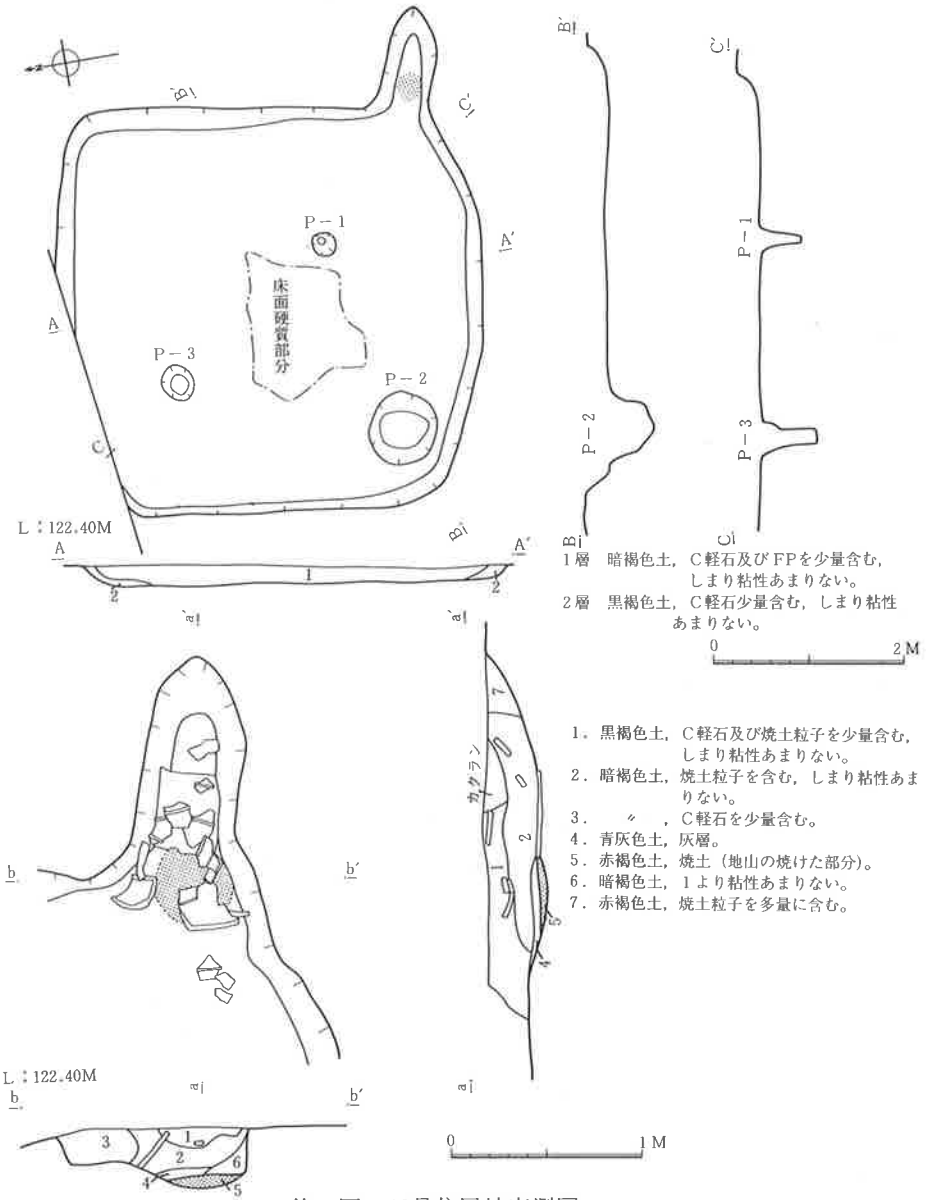
プランは方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は堀の覆土中にあり、貼り床になっていて、所々に踏み固めが見られる。

覆土は４層に分層され自然堆積を示し、しまりがない。

ピットは検出されなかった。

カマド　東壁中央南側で検出。石組のカマドである。煙道は半円形に掘り込まれている。

遺物は比較的少ないが、カマドからまとまって出土している。



第16図　42号住居址実測図

42号住居址　（第16図　　**図版**７－２　表４）

本址は調査区北西側で検出された。

確認面は礫を含む、暗褐色土層上面である。

プランは方形で、壁はなだらかに立ち上がる。床面はほぼ平坦で、中央部分によく踏み固めた跡が残る。

覆土は２層に分層され自然堆積を示す。

ピットは３基検出され、Ｐ－１、Ｐ－３がやや深くなる。

カマド　東壁南側で検出、埴輪を構築材としている。袖は縦に割った円筒埴輪を地面に突きさしている。煙道は円筒埴輪をそのまま横に倒して用いている。煙道部の先端以外は比較的遺存状態が良かった。

遺物は破片が数点のみである。

第２項　畑状遺構・水田址　（第３図　　図版７－６・７）

畑状遺構は東側、水田址は西側で検出された。共に浅間Ｂ軽石下の遺構である。

畑状遺構は堀及び50号住居址より上層で検出された。併うと思われる遺物の出土はない。

水田址は西端部のトレンチ調査で検出された。畦と思われる部分も検出されている。

第４節　中　　世

井戸　（第３図　　**図版**７－８）

２基が検出された。１号井戸はＥ－21とＦ－21グリッド、２号井戸はＦ－20グリッドにあり深さは１号井戸が2.4ｍ２号井戸が2.9ｍである。

遺物は１号井戸から内耳土器、２号井戸から茶臼が出土している。

第５節　時代不明遺構

本遺跡で検出された遺構のうち時代が不明なものは、住居址10軒、溝７条、土坑37基である。

第１項　住居址　（第３図　表３－４）

時代不明の住居址は４・６・７・15・16・22・24・40・41・45号住居址の10軒である。このうち４・６・16号住居址は付帯設備がなく、住居址としては疑問が残る。45号住居址は壁際のみの調査である。あとの６軒は遺物がほとんど出土していない。

第2項　溝　（第3図　表2）

溝は7条検出されている。1号溝は欠番である。

表2　溝一覧表

遺構番号	検出区	本調査区内全長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	走方向	断面形	備考
2	G-24・H-24	14.4	92	14	北北西→南南東	鍋底状	8号溝より新しい。
3	D-33,34・E-33,34 F-34	21.8	360	14	北→南	浅い皿状	館跡・18・19・21号住居址より新しい。4号溝とほぼ平行する。
4	C-33・D-33・E-33 F-33	29.1	430	102	北→南	V字状	館跡・18・20・22号住居址より新しい。2段の掘り込み。
5	E-28・F-28	5.0	不明	不明	北→南	不明	調査一部分。
6	E-27・E-28	6.9	64	25	北北西→南南東	鍋底状	
7	E-26・E-27	4.2	76	22	北北西→南南東	鍋底状	
8	G-23・G-24	16.2	86	48	北東→南西	U字状	2号溝より古く、36号土坑より新しい。B軽石(純層ではない)を多く含む。

第3項　土坑　（第3図　　表5）

土坑は37基検出された。円形のプランで浅いものが多い。分布は調査区中央東よりにやや多く集まる。これらの土坑はほとんどは出土遺物がない。

第6節　トレンチにより確認された遺構

トレンチにより確認した遺構は住居址、土坑、溝である。

第1項　住居址　（第3図）

8軒が確認された。そのうちの2軒は東壁南側にカマドを有する。カマドは煙道が長いものである。住居址の分布状況、確認された状況から、古墳時代前期及び奈良・平安時代と考えられるものが多い。

第2項　溝　（第3図）

溝は4条が検出された。そのうちの3条は調査区内で、2・4・8号溝として調査が行なわれている。

第3項　土坑　（第3図）

調査を行なった土坑と同様の形状のものが多い。このうちの1基は2号井戸の近くにあり、確認面の覆土の状態がよく似ている。

表３　住居址一覧表(1)

番号	検出グリット	プラン	規模(m) 長軸	規模(m) 短軸	主軸方向	ピット	周溝	貯蔵穴	炉・カマド	備考	時代
1	C－37	方形	275	205	N43°－E			有	炉址	2号住居址より新。	古墳・中
2	C－37 D－37	隅丸方形	485	443	N46°－W	2			炉址	1号住居址より旧。	弥生
3	D－36 D－37	方形	506	374	N83°－E	4		有	カマド(東)	9・11号住居址より旧。	古墳・中
4	E－37	不整形	298	210	不明					5号住居址より新。 6号住居址より旧。	不明
5	D－37 E－37	方形	270	193	N61°－E	1			(焼土)	4・6号住居址より旧。	古墳・中
6	E－37	方形	291	173	N61°－W					4・5号住居址より新。	不明
7	E－37	方形	730	不明	不明	4				15号住居址より旧。 8号住居址とは不明。	不明
8	E－36 E－37	方形	538	522	N66°－E	7			炉址	カクラン激しく一部床面のみ検出。 7号住居址とは新旧関係不明。	古墳・中
9	D－37	隅丸方形	464	437	N48°－E					3号住居址より旧。	弥生
10	E－36 D－36	方形	523	436	N84°－W	2		有			古墳・前
11	D－36	方形	397	324	N60°－W	2	有	有		3号住居址より旧。	古墳・前
12	C－36	方形	390	不明	N78°－E				カマド(東)	13号住居址より旧。	平安
13	C－36	方形	450	350	N79°－W				カマド(東)	12号住居址より新。	平安
14	D－35 D－36	(方形)	707	——	N60°－E	(2)		有	カマド(東)	掘より旧。	古墳・中
15	E－37 F－37	方形	346	280	N88°－E				カマド(東)	7号住居址より新。	不明
16	D－35	隅丸方形	277	177	N42°－E	1				17号住居址より新。	不明
17	D－34 D－35	隅丸方形	570	450	N86°－W				カマド(東)	16号住居址より旧。	平安
18	C－34 D－34	(方形)	386	335	N64°－E	2			不明	20号住居址より旧。 3・4号溝より旧。	古墳・前
19	E－34	方形	504	435	N71°－E				焼土		古墳
20	C－33	方形	590	——	N62°－E	2	有	有		欄列より旧。3・4号住居址より旧。18号住居址より新。	古墳・中
21	D－33 D－34	方形	375	310	N80°－E				カマド(東)	掘より新。 3・4号住居址より旧。	平安
22	F－33 E－33	(方形)	405	——	不明	1				4号住居址より旧。	不明
23	D－32 D－33	方形	676	——	N74°－E	6		有	炉址	欄列より旧。	古墳・中
24	E－32 E－33	方形	400	253	N39°－E				焼土	25号住居址より新。	不明
25	E－33	方形	398	380	N50°－W	5		有	炉址	24号住居址より旧。	古墳・中

表4　住居址一覧表(2)

番号	検出グリット	プラン	規模(m) 長軸	規模(m) 短軸	主軸方向	ピット	周溝	貯蔵穴	炉・カマド	備考	時代
1	C－37	方形	275	205	N43°－E			有	炉址	2号住居址より新。	古墳・中
26	E－32 D－32	方形	305	300	N80°－E			有	カマド(東)	掘より新。	平安
27	D－31	方形	690	660	N63°－E	(6)		有	炉址	構列より旧。	古墳・中
28	E－31	方形	370	350	N87°－W	4		有	カマド(東)	掘より新。	平安
29	E－27 E－28	方形	396	320	N85°－E	3			カマド2 (東・南東)	埴輪使用カマド。	平安
30	E－26	方形	430	345	N89°－E	3			カマド(東)		平安
31	H－24	方形	516	459	N80°－E	4	有	有	カマド(東)		奈良
32	G－23	方形	527	500	N74°－E	8	有		炉址		古墳・前
33	G－22 H－22	一辺へこむ方形	567	403	N85°－E	3		有	カマド(東)	35号住居址より旧。	奈良
34	E－20	方形	380	271	N33°－W	2			焼土	41号住居址より旧。	古墳・前
35	H－21 H－22	方形	412	367	N63°－E	2				33号住居址より旧。	古墳・前
36	D－22	方形	500	483	N32°－W		有	有	炉址		古墳・前
37	E－21	方形	305	300	N10°－E	1	有		カマド(北)		不明
38	E－21	方形	395	210	N38°－W	1			カマド(北)	39号住居址より新。	平安
39	E－21	方形	380	260	N20°－W	1			カマド(東)	38号住居址より旧。	平安
40	D－21	方形	227	218	N16°－W	1			焼土		不明
41	E－20	方形	300	221	N80°－W					34・48号住居址より新。	不明
42	D－16	方形	442	428	N92°－E	3			カマド(東)	埴輪使用カマド。	平安
43	E－15 D－15	方形	520	516	N62°－E	4		有			古墳・前
44	H－16	方形	500	472	N68°－E	2					古墳・前
45	H－15	不明	(250)	——	不明					調査一部のみ。	不明
46	H－16	方形	557	514	N50°－E	6					古墳・前
47	H－14	方形	308	——	N79°－W	1		有	カマド(東)		平安
48	F－20 F－21	方形	485	346	N65°－E				炉址2		古墳・前
49	C－37	方形	450	——	不明	1				掘より旧。	古墳
50	E－28	方形	459	289	N8°－W				カマド(東)	掘より新。 畑状遺構より旧。	平安

表５　土坑一覧表

土坑番号	プラン	検出グリット	長軸cm	短軸cm	深さcm	主　軸	備　考
1	楕円形	D－37	1.46	100	50	N５°－E	１号住居址より古い。
2	円　形	D－31	62	64	28		柵列より新しい。
3	楕円形	D－35	128	110	60		
4	長方形	E－34・E－35	287	176	26	N69°－W	中世遺物出土。
5	円　形	E－32	118	108	11		７号土坑より古い。
6	不整形	E－33	197	92	26	N12°－E	
7	円　形	E－32	93	86	21		５号土坑より新しい。
8	円　形	D－28	71	61	18		
9	円　形	E－27	103	102	29		
10	円　形	E－27	143	133	22		
11	楕円形	E－27	117	74	7		
12	楕円形	E－27	112	86	15		
13	円　形	E－27	102	10	16		
14	円　形	D－26	68	65	34		
15	円　形	F－27	74	69	35		
16	方　形	E－26	141	103	22	N90°－W	
17	楕円形	F－26	100	80	16		
18	円　形	F－26	80	75	10		
19	楕円形	E－26・F－26	122	105	16	N84°－W	
20	円　形	E－26	77	74	32		
21	不　明	F－26	不明	86	25		
22	楕円形	E－26	123	95	76		
23	楕円形	D－26	87	45	20	N９°－W	円形周溝より新しい。
24	不整形	D－26	121	72	10		
25	隅丸方形	E－22	192	132	80	N０°	
26	隅丸方形	F－21	115	87	43	N61°－W	
27	長方形	F－21	128	86	19	N47°－W	
28	台　形	F－21	322	265	25	N51°－W	
29	隅丸方形	H－25・I－25	71	53	52		
30		欠番					
31	円　形	G－25	85	82	34		
32	円　形	G－25・G－24	115	112	68		
33	円　形	G－24	116	115	56		
34	楕円形	G－23	85	48	15	N82°－E	
35	円　形	H－24	113	105	48		
36	不整形	H－23	130	98	75		
37	円　形	E－15	100	98	16		
38	不　明	H－15	——	——	51		44号住居址より古い。

第Ⅴ章　検出された遺物

第１節　縄文時代

本遺跡検出の縄文時代の遺物はいずれも遺構に併うものではない。

第17図１～６は諸磯ｂ式である。１・２は半截竹管による爪形文を描く。３は浮線文を描くものである。４・５は縄文が施文される。６は沈線が集合化し諸磯ｃ式に近くなる。

第17図７～９は諸磯ｃ式である。７にはボタン状突起が施される。８は外反する口縁部の破片である。９は胴部の破片で、集合沈線を横、斜方向に描く。

第17図10・11は興津式である。貝殻腹縁文を描くもので、11は波状口縁の一部である。

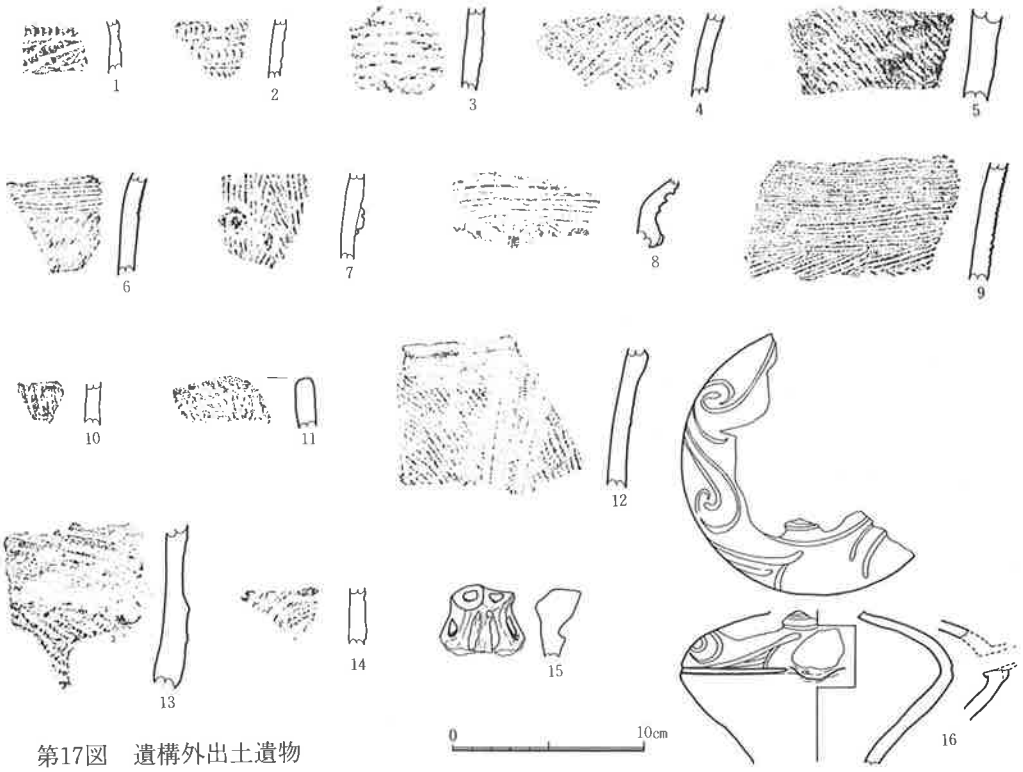
第17図12は加曽利ＥⅡ式である。磨消縄文が見られる。

第17図13・14は加曽利ＥⅢ式と思われる。14は称名寺式の可能性もある。

第17図15は堀之内式の口縁に付される、把手と思われる。

第17図16は安行Ⅲｂ式の注口土器である。文様構成は東北地方の大洞ＢＣ式にきわめてよく似ている。

掲載しなかったもののうち、出土量の多いものは諸磯ｃ式土器で、ついで諸磯ｂ式となっている。分布は調査区中央に多い。



第17図　遺構外出土遺物

第２節　弥生時代

本遺跡検出の弥生時代の遺物は２・９号住居址出土の２点と、遺構外で検出された樽式土器の破片１点である。

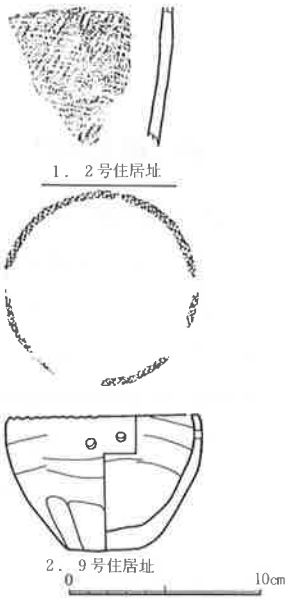
２号住居址出土遺物　（第18図１）

甕形土器の胴部破片と思われる。後期赤井戸式であろうか。

９号住居址出土遺物　（第18図２　　**図版**９）

鉢形の土器である。ほぼ完形で器高7.2㎝、口径10.0㎝、底径4.2㎝である。口唇部に縄文が施される。穿孔は内側から行なわれている。内外面共に細かい削りが見られる。外面底部はヘラ削りを行なう。床着土器でＣ軽石層直下の出土である。

後期赤井戸式と思われる。



第18図　２，９号住居址出土遺物

第３節　古墳時代

本遺跡検出の古墳時代の遺物は前期・中期を中心に多い。他に遺構に併わない遺物として埴輪片がやや多く検出されている。

第１項　住居址出土遺物　（第19～24図　　**図版**９～12　表６～８）

前期の住居址から出土した遺物は土器、石製品である。

土器では甕・台付甕・小形甕・坩・手捏・器台・高杯が出土している。このうち器台・高杯は破片のみの検出である。台付甕は10・11・18・32・36号住居址でＳ字状口縁のものが検出されている。

石製品は10号住居址出土の滑石製有孔円盤１点のみである。

中期の住居址から出土した遺物は土器、石製品である。

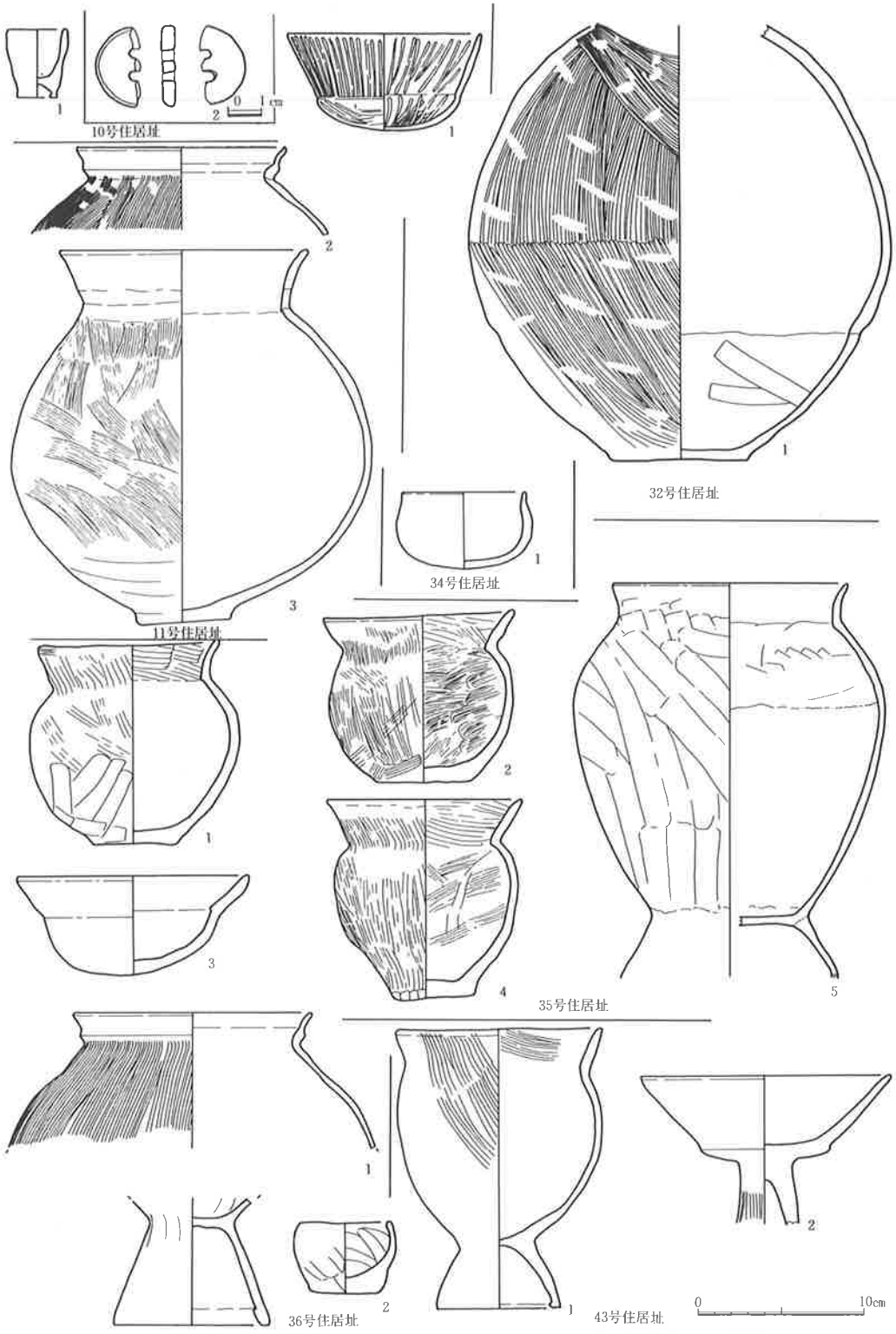
土器では甕・壺・甑・杯・高杯・坩・鉢・小形甕・埦等が出土している。このうちカマドを有する３号住居址からは、覆土中からの出土で図化しなかったが長胴化した甑が出土している。石製品では滑石製紡垂車、砥石が出土している。

第２項　館跡出土遺物

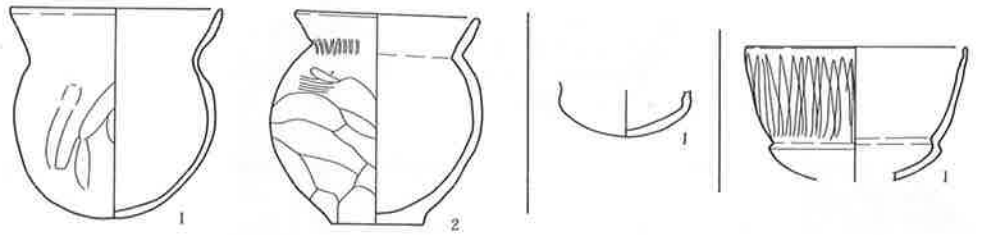
大形整理箱２箱分出土している。そのほとんどは細片で住居址等からの流れ込みと思われ、時代決定しうる遺物の出土はない。

第３項　円形周溝出土遺物

数点出土しているが、流れ込みと思われる。



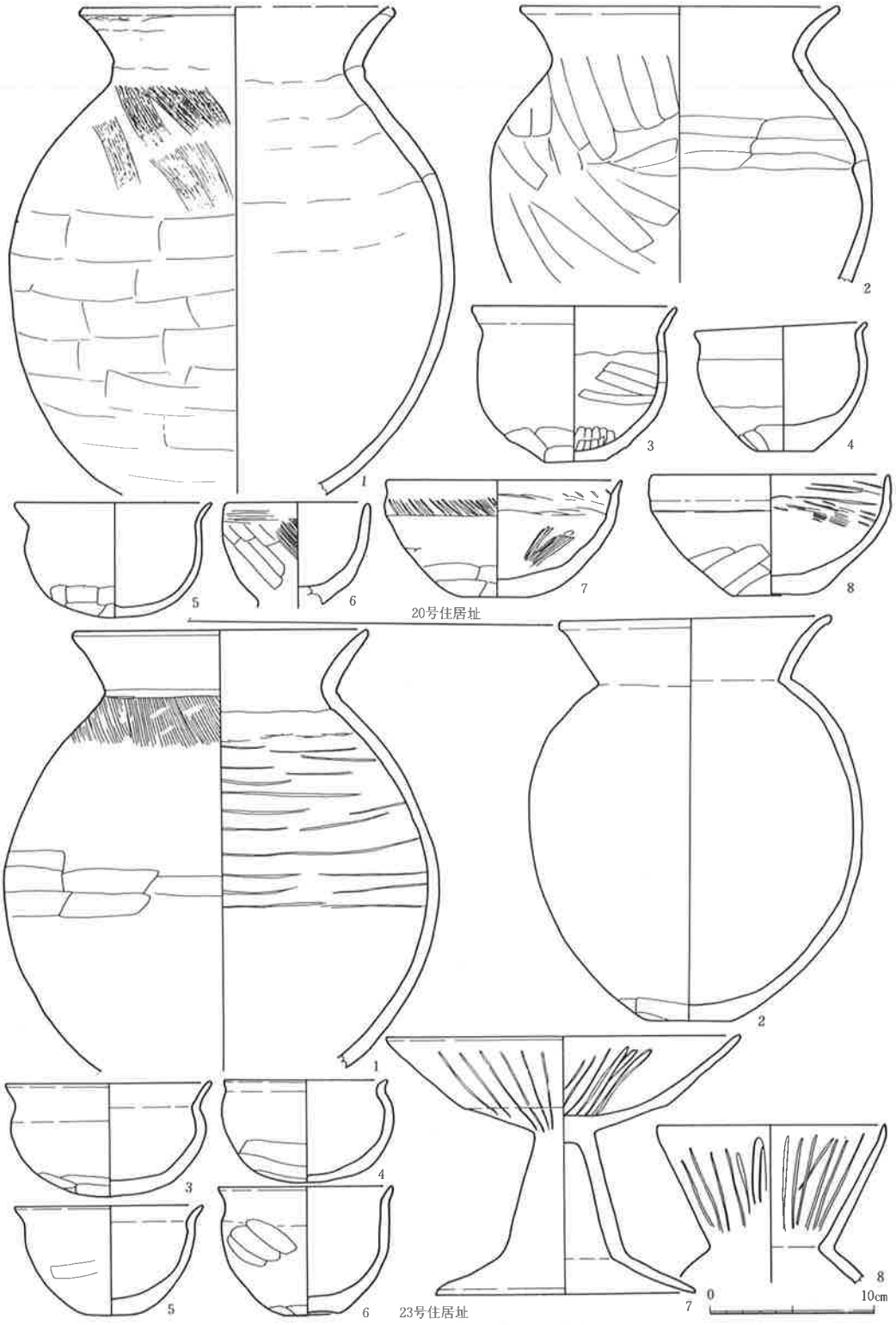
第19図　10・11・32・34・35・36・43号住居址出土遺物



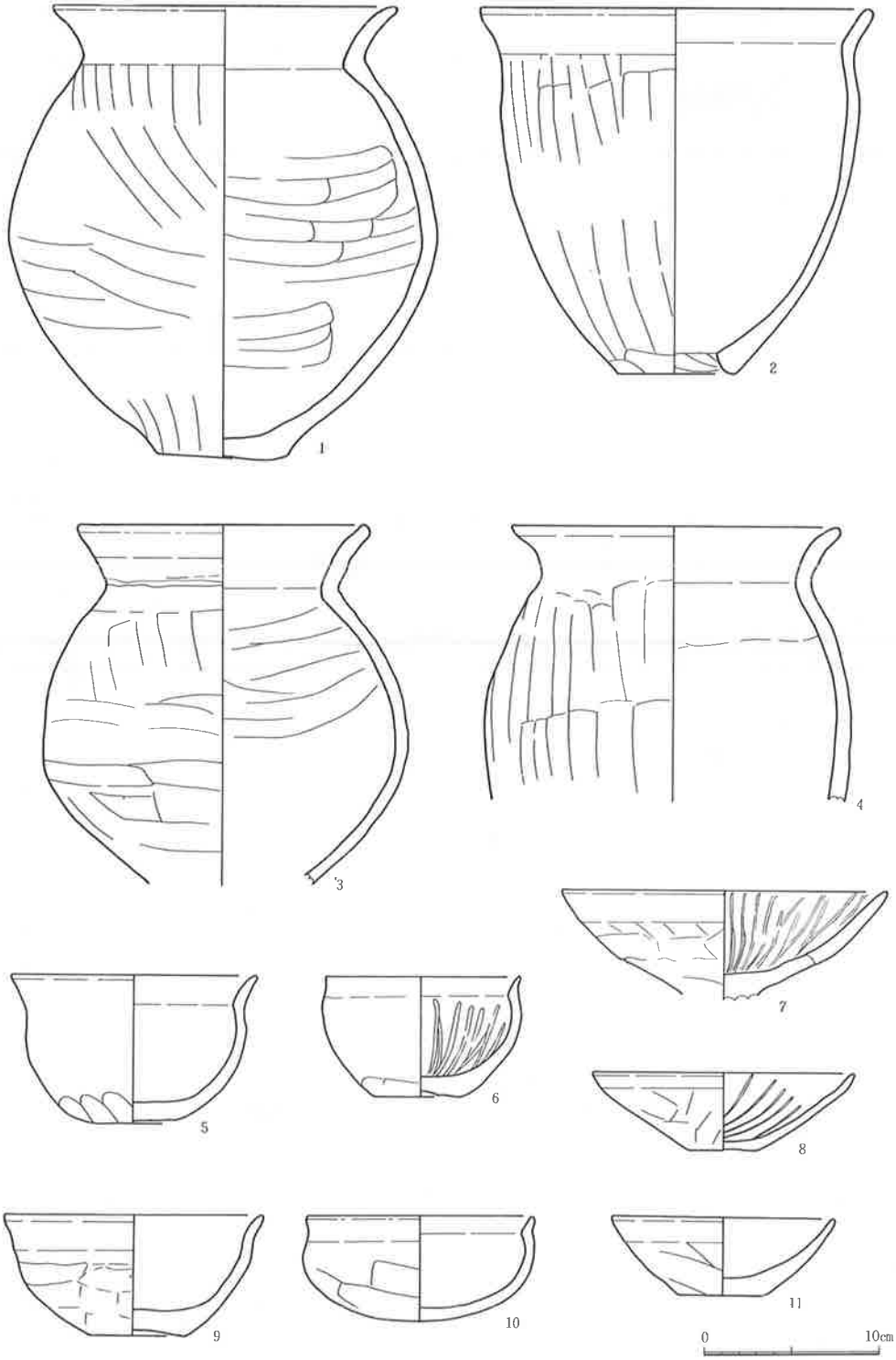
第20図　44・46・48住居址出土遺物

表6　10、11、32、34、35、36、43、44、46、48号住居址出土遺物観察表

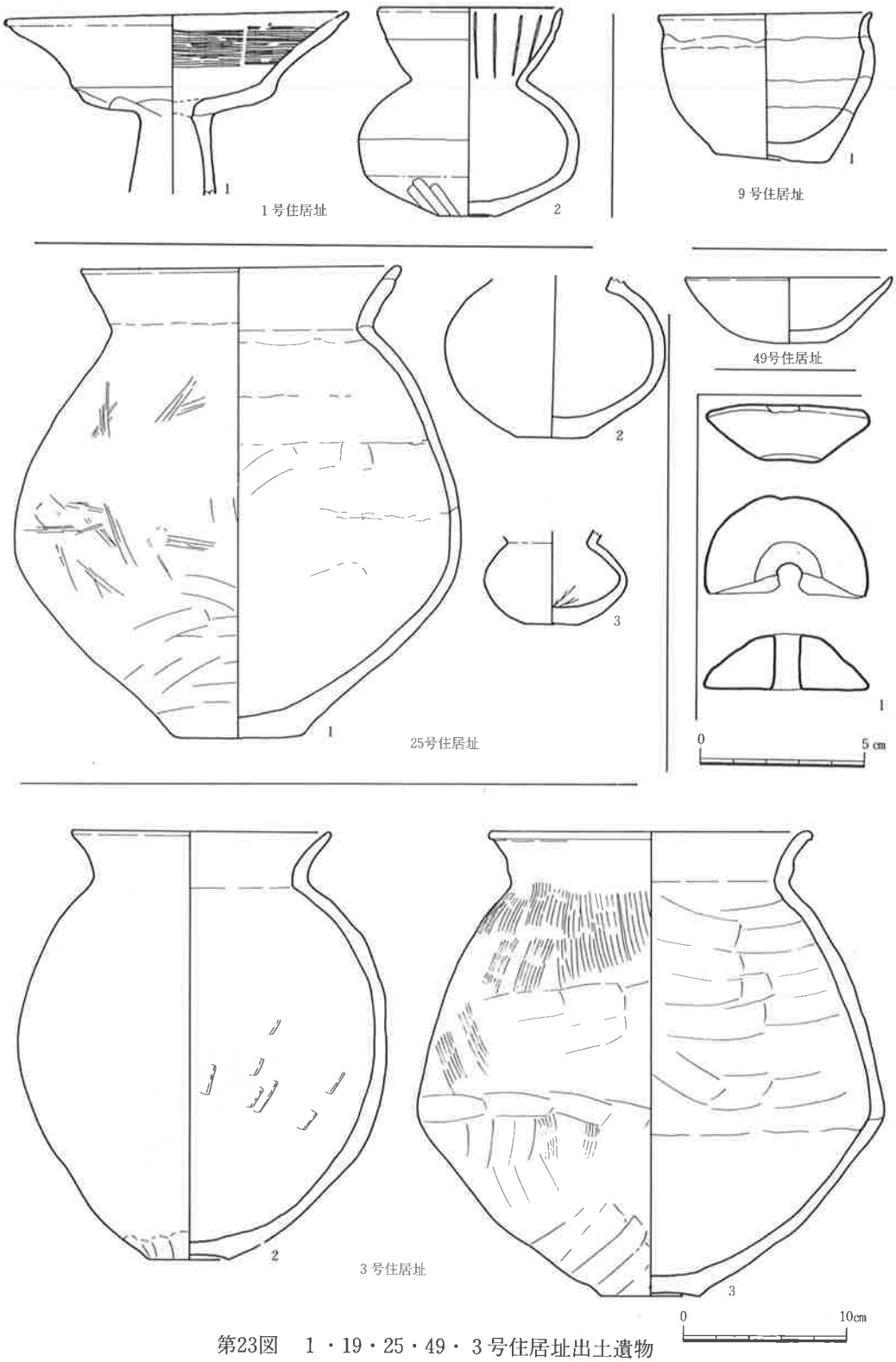
住居址番号	番号	器形 残存度	器高 口径(cm) 底径	器形一成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10号住	1	手づくね 1/4残	4.2 3.6 2.4	上底・やや荒く、粘土粒外面に残る。	細かい。	良好	褐色、黒斑有り	5床
	2	有孔円盤 1/4残	直径2.4 高さ0.4 重量 2.28g	円形、穿孔2つ、穿孔は一方向から。	滑石製。			6
11号住	1	坩 1/4残	5.9 11.7	内外面丁寧なミガキ。(暗文)入る。	細かい。	良好	赤褐色	3床
	2	台付甕 口縁部1/4残	残5.3 12.6 —	S字状口縁。 内面口縁下部指押痕あり。外面刷け目。	細かい。	良好	淡褐色	
	3	甕 口縁部 一部欠	22.9 14.8 5.6	底部つぼまる・口縁部内外面横ナデ、外面縦横方向の刷け目をくりかえす。 底部付近ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	褐色～黒褐色	2
32号住	1	甕 1/4残	残26.5 — 8.2	内面ケズリ、外面丁寧なミガキ。 接合痕あり。	細かい。	良好	褐色～黒褐色	19床
34号住	1	坩 完形	4.7 7.5 —	底部丸底。口縁部横ナデ、内外面ミガキ。	砂粒を含む。	良好	黒褐色	1床
35号住	1	小形甕 完形	12.5 11.0 5.0	底部平底。口縁部内面小口状工具による横方向のケズリ（ナデ）。 口縁部外面上部横ナデ（縦方向のケズリを消す）下部縦方向のケズリ。	砂粒を少量含むが細かい。	良好	外面、赤褐色～黒褐色	6床
	2	小形甕 口縁一部欠	10.4 11.5 5.6	平底。胴下半部ヘラケズリ、胴中央部小口状工具による、斜方向のケズリが所々見られる。	小石を含む。	良好	にぶい褐色	5床
	3	坩 完形	6.0 14.0 —	底部丸底。 内外面ともに丁寧な成形ミガキが入る。	砂粒を少量含む細かい。	良好	外面、赤褐色～黒褐色 内面黒褐色	2覆土中
	4	小形甕 ほぼ完形	12.3 11.8 5.0	平底。口縁内側櫛状工具による横ナデ。胴部上半部を中心に斜縦方向の削り 外面口縁櫛状工具による斜方向の削り後に口縁上部横ナデ。胴部櫛状工具による縦方向の削り。底部にも入る。胴下部ヘラケズリ。	細かい。	良好	褐色、口縁部 一部黒褐色	4床
	5	台付甕 1/4残	24.0 14.0 —	胴部歪む、口縁部内外面横ナデ、内面胴部ナデ。 外面胴部ヘラケズリ。	砂粒小石含み荒い。	良好	外面、赤褐色～黒褐色 内面灰褐色	7床
36号住	1	台付甕 1/4残	残8.2、脚7.5 14.2 9.3	「S」字状口縁、脚台付折り返し。 内外面削り目丁寧になでられる。	細かいが少量の砂粒を含む。	良好	上部黒褐色 下部及び内面橙褐色	1貯
	2	手づくね 口縁部 一部欠	4.4 5.2 4.2	底部平底、口縁部やや内彎する。	細かい。	良好	褐色、黒斑有り	5床
43号住	1	台付甕 口縁部 一部欠	17.4 12.3 6.8	脚台部、折り返しぎみになる、内面口縁部横方向の刷け。 外面口縁部から胴上半部まで細かい刷け目を所々ほどこす。	小石を少量含む。	良好	外面、にぶい褐色 内面、褐色	3床
	2	高坏 1/4残	残9.0 14.8	坏部は稜を持つ、内面坏部上半横ナデ、脚部刷け目。 外面坏部上半横ナデ。	小石、石英長石を含む。	良好	内外面赤褐色～黒褐色	2床
44号住	1	小形甕 完形	11.1 10.9 —	底部丸底、やや歪む、口縁部内外面横ナデ。 外面ヘラケズリ。	小石を少量含む。	良好	淡褐色	2貯
	2	小形甕 完形	11.1 9.5 4.9	底部平底。頸部縦方向のケズリ。口縁内面横ナデ。 外面ヘラケズリ。一部刷け目。	小石を含む。	やや不良	黒褐色	3床
46号住	1	坩 口縁部欠	2.5 — —	丸底。内外面ミガキ。	小石を含む。	良好	赤褐色 黒斑有り	4床
48号住	1	坩 1/4残	7.0 11.7	口縁部外面縦方向の暗文入る。内面ミガキ。	細かい。	良好	赤褐色	床



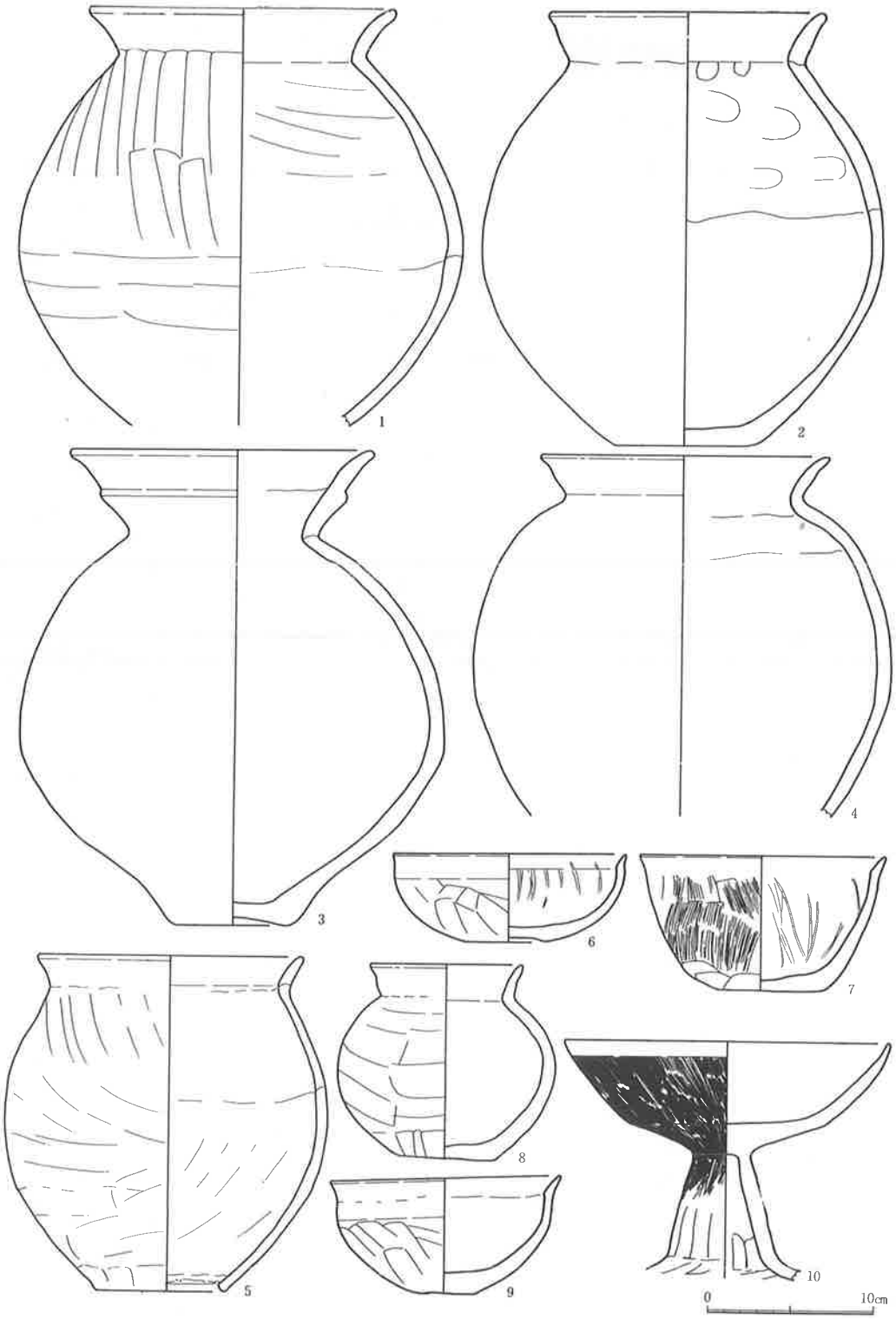
第21図　20・23号住居址出土遺物



第22図　27号住居址出土遺物



第23図　1・19・25・49・3号住居址出土遺物



第24図　14号住居址出土遺物

表７　20、23、27号住居址出土遺物観察表

住居址番号	番号	器形 残存度	器高 口径(cm) 底径	器形一成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
20号住	1	甕 底部欠	30.0 18.5 ——	口縁部内外面横ナデ。 外面胴上部斜方向のケズリ。中央横方向のケズリ。	小石を含む。	良好	褐色～黒褐色	6
	2	甕 ½残 底部欠	17.0 19.2 ——	口縁部内外面横ナデ。 内外面ヘラケズリ、輪積痕のこす。	小石を含む。	良好	褐色	
	3	小形甕 口縁部 一部欠	9.6 12.3 3.6	平底、口縁部内外面横ナデ、内面胴部底部付近ヘラケズリ。 接合痕残る。 外面胴下部荒いヘラケズリ。	小石を含む。	良好	外面、褐色 内面、赤褐色	8床
	4	小形鉢 完形	7.7 10.4 3.3	平底、口縁部内外面横ナデ。 外面底部付近ヘラケズリ。	砂粒、小石を含む。	良好	外面、にぶい褐色 内面明褐色	3
	5	小形鉢 口縁部 一部欠	7.0 11.9 ——	丸底、口縁部内外面横ナデ。 外面底部付近ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	外面、黒褐色 内面、赤褐色	9床
	6	高坏 脚部欠	6.2 8.4 ——	口縁ほぼ垂直に立ち上る。口縁部内外面横ナデ。 外面ヘラケズリの後、一部細かい刷け目。	小石を含む。	良好	橙褐色	7
	7	鉢 完形	7.2 14.2 4.0	平底。口縁部外面縦方向のケズリ。 内面横方向のケズリのち、口縁上半部横ナデ。 中央部内外面ミガキ、底部きめの細かいヘラケズリ。	小石を含む。	良好	橙褐色 外面一部黒斑	2
	8	鉢 ½残	7.4 14.4 4.3	平底、口縁部稜を持つ、口縁部内外面横ナデ。 外面底部付近ヘラケズリ。	小石を含む。	良好	上半黒褐色 下半褐色	6
23号住	1	甕 ½残	27.0 17.8 ——	口縁部横ナデ、胴部上半刷け目、下半ヘラケズリ。 内面輪積痕残す。	砂粒を含む。	良好	褐色	22床、23、25、31床
	2	甕 ほぼ完形	24.7 16.3 5.1	外面ミガキ、胴下端部ヘラケズリ。	小石を含む。	良好	黒褐色	3床
	3	小形鉢 完形	7.0 12.3 ——	口縁「く」の字状に外反する。 口縁部外面横ナデ。	小石を含む。	良好	赤褐色	71床
	4	小形鉢 口縁部 一部欠	6.3 9.8 ——	丸底ぎみであるが、一部平底となる。 口縁部外面横ナデ、外面胴下部ヘラケズリ。	細かい。	良好	淡褐色 一部黒褐色	36床
	5	小形鉢 ½残	6.7 11.2 2.8	平底、口縁部横ナデ、外面胴部ヘラケズリ。	小石を含むが細かい。	良好	淡褐色	69床
	6	小形鉢 口縁部 一部欠	7.8 10.4 3.3	底部上げ底になる、口縁部内外面横ナデ、内面一部ミガキが入る。 外面胴部ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	褐色～黒褐色	貯1
	7	高坏 ½残	15.9 21.4 15.8	脚部ラッパ状となる、坏部稜を持つ。 内外面暗文入る。	小石を含む。	良好	外面、褐色 坏部内面、黒褐色	1床
	8	坩 口縁部のみ	8.9 13.7 ——	「く」の字状に開く。 内外面暗文入る。	小石を含む。	良好	赤褐色	66床
27号住	1	甕 ½残	26.0 19.7 7.5	胴部張る。口縁部横ナデ、内面横方向のケズリ。 外面縦、斜、横方向のケズリ。	小石を含む。	良好	褐色 黒斑有り	11床、16 12床
	2	甑 ½残	22.0 22.2 穴4.2	口縁部横ナデ、内面横方向のケズリ。 外面縦方向のケズリ。	細かい。	良好	橙褐色 黒斑有り	1床、3、4 6床
	3	甕 底部欠	20.8 16.3 ——	口縁部横ナデ、内面上半横方向のケズリ。 外面上半縦、斜方向、下半横方向のケズリ。	小石を含む。	良好	褐色	8床
	4	甕 上半½残	15.9 18.8 ——	胴部張る。口縁部横ナデ。 内面横方向、外面縦方向のケズリ。	細かい。	良好	褐色 黒斑有り	20床
	5	小形鉢 完形	8.6 14.2 5.0	上底ぎみの平底、口縁部横ナデ、内面指による調整。 外面底部付近ヘラケズリ。	小石を含む。	良好	にぶい褐色 黒斑有り	9床
	6	小形鉢 ほぼ完形	7.0 11.2 5.1	底部中央のみ上底、口縁部横ナデ、内面暗文入る。 外面底部及び底部付近ヘラケズリ。	小石を含む。	良好	外面、黒褐色 内面、褐色	7床
	7	高坏 ½残 坏部のみ	6.3 18.4 ——	口縁部外面横ナデ、内面暗文入る。 外面ヘラケズリ。	小石を含む。	良好	褐色、黒斑有り	2床
	8	坏 ½残	4.5 14.9 3.7	口縁部横ナデ、内面暗文入る。 外面ヘラケズリ。	細かい。	良好	褐色	床
	9	小形鉢 完形	7.0 14.8 5.5	口縁部横ナデ、外面下半部横方向のヘラケズリ。	小石、砂粒を多く含む。	良好	褐色	5床
	10	埦 ½残	6.1 13.0 ——	丸底ぎみになる、口縁部横ナデ、外面ヘラケズリ。	細かい。	良好	褐色	32床、33、35
	11	坏 ½残	4.5 12.5 4.6	口縁部横ナデ、外面ヘラケズリ。	小石を含む。	良好	褐色～黒褐色	15床

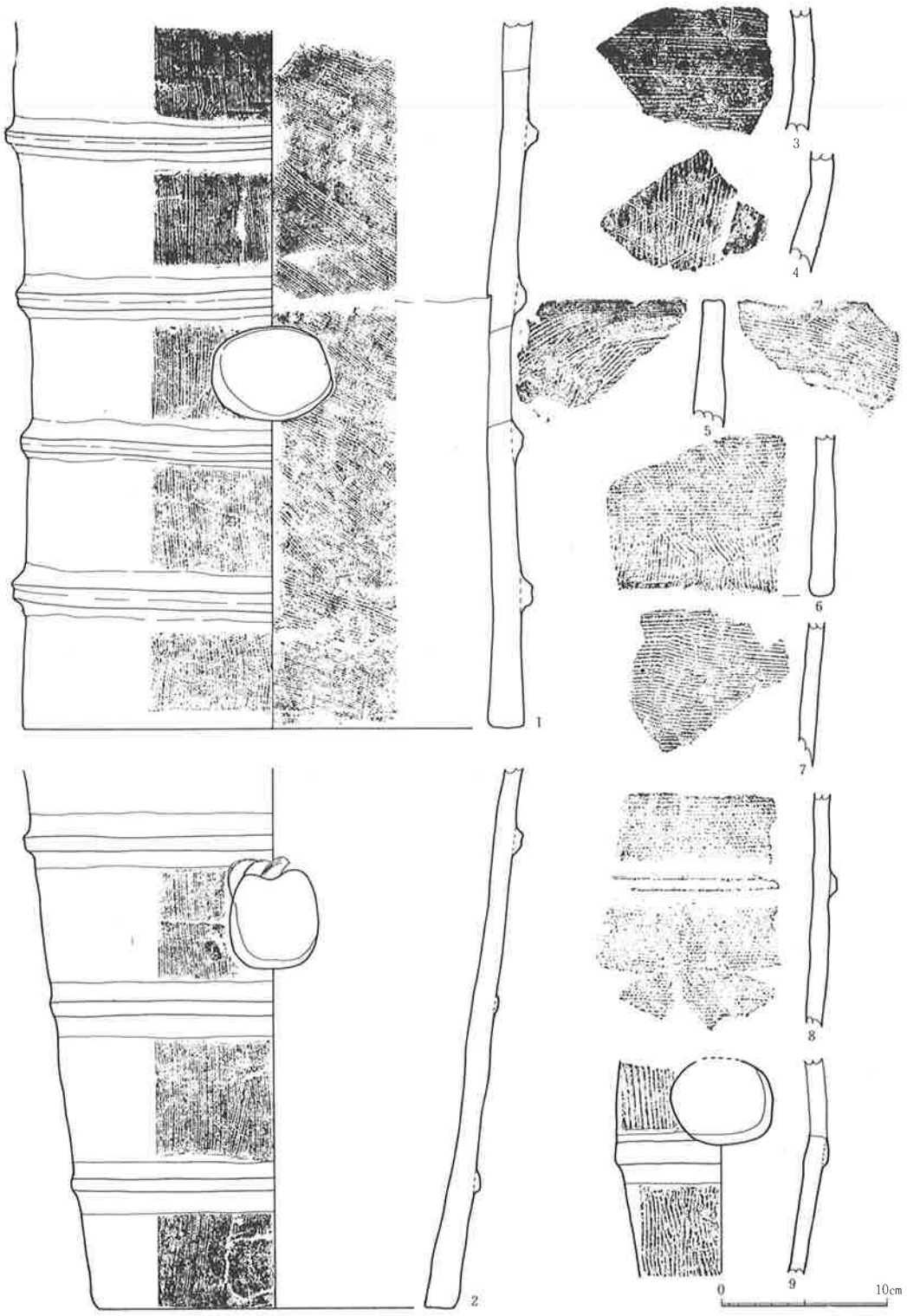
表８　１、19、25、49、３、14号住居址出土遺物観察表

住居址番号	番号	器形 残存度	器高 口径(cm) 底径	器形ー成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
１号住	１	高坏 ½残	10.8 20.6 ——	杯部稜を持つ・坏部口縁内外面横ナデ、内面ヘラケズリ。 外面坏部下半ヘラケズリ。	小石を含む。	良好	褐色	２、３床 ４貯
	２	坩 ½残	12.8 10.8 3.3	胴部張りだす、口縁「く」の字状に外反する。 口縁部内外面横ナデ、内面口縁部暗文。	小石を含む。	良好	褐色	６貯 23、26床
19号住	１	小形鉢 口縁部 一部欠	9.4 12.9 6.8	平底やや上底ぎみ、口縁部内外面横ナデ。 全体に歪みが激しい。	細かい。	良好	褐色 黒斑有り	１床
25号住	１	甕 ほぼ完形	38.9 19.0 8.0	胴部張りだす、胴部張りだし部分ヘラケズリ。 内面接合痕ある。	細かい。	良好	外面、黒褐色 内面、褐色	１床
	２	坩 口縁部欠	残9.7 —— 4.2	平底胴が張る。 丁寧な整形。	小石を含むが細かい。	良好	褐色、黒斑有り	９床
	３	坩 口縁部欠	最大径8.6 —— 3.0	平底。ソロバン玉状となる。 内面底部ヘラケズリ調整。	細かい。	良好	黒褐色	12床
49号住	１	坏 完形	4.0 12.5 3.5	平底。口縁部外面粘土ひもを貼りつけた痕が残る。	小石、砂粒を含む。	良好	褐色 黒斑有り	１床
３号住	１	紡錘車 ½残	高1.7 底径５ 重量2.9g	逆台形。穿孔は両方向から。	滑石製。			
	２	甕 口縁一部欠	26.3 15.5 5.0	底部上げ底ぎみとなる。口縁部内外面横ナデ。 内面胴部一部ヘラケズリ。 外面胴下部ヘラケズリ。	砂粒、小石を含む。	良好	褐色	40、23、21、22
	３	甕 ½残	28.5 19.0 6.0	胴中央部張りだす。口縁部内外面横ナデ、内面胴部上半ヘラケズリ。 外面胴部上半刷け目、中央部ヘラケズリ、張りだし部分横方向のケズリ。 底部ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	褐色	11、12貯 ２、３、４
14号住	１	甕 ½残	25.4 18.4 ——	胴部張りだす。口縁部内外面横ナデ、内面ヘラケズリ。 外面上半部ハケ、中段ケズリ。	砂粒を含む。	良好	内面褐色 外面黒褐色	３、４床
	２	甕 口縁部 一部欠	26.5 16.3 8.0	口縁部内外面横ナデ、内面指痕。 外面底部付近ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	褐色	６、12床 ４、５貯
	３	壺 口縁、体部 一部欠	29.0 18.2 7.2	口縁部二段になる。口縁部外面横ナデ。 底部上底ぎみ。	細かい。	良好	褐色	５、８、13、20、21、23カ
	４	甕 ½残	22.0 17.2 ——	口縁部内外面横ナデ、外面風化激しい。	砂粒を含む。	良好	褐色	18、29、37、33、44カ
	５	甑 口縁部欠	20.5 16.0 7.8	口縁部内外面横ナデ、外面胴上半部ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	褐色	
	６	坏 ½残	5.5 14.0 4.6	平底。口縁部内外面横ナデ、内面暗文。 外面ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	赤褐色	16床
	７	鉢 ½残	8.3 14.8 6.5	平底。口縁部内外面横ナデ、内面暗文。 外面刷け目、底部ヘラケズリ。	小石を含む。	良好	赤褐色	24床
	８	小形甕 口縁部 一部欠	11.9 9.2 5.6	外面ヘラケズリ。	小石、石英を含む。	良好	褐色	９床
	９	小形鉢 口縁部 一部欠	7.0 14.0 3.4	平底。口縁部内外面横ナデ、外面ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	赤褐色	７床
	10	高坏 ½残	残15.0 19.5 顎部3.3	杯部稜を持つ・口縁部内外面横ナデ、外面坏部刷け目。 脚部内外面ケズリ。	小石を含む。	良好	赤褐色	36カマド

第４項　遺構外出土埴輪　（第25図　　図版12）

埴輪はグリット及び、住居址、溝等の覆土から出土したものと、平安時代の住居址のカマドの構築材として検出されたものがある。そのほとんどは破片であるが、大形整理箱３箱分出土している。

第25図１は42号住居址カマドの煙道に使用されていたものである。底径30.5cm、残存高46cmの円筒埴輪である。突帯は４段で、縦刷毛である。透孔は３ヶ所見られる。



第25図　カマド構築材埴輪・遺構外出土埴輪

第25図２は42号住居址のカマドの袖として使用されていたものである。底径22㎝、残存高32㎝である。透孔には指痕が見られる。

第25図３～５は形象埴輪の破片である。３は盾の一部分であろう。４は縦の突帯が見られ、一部朱塗りをしている。又三角を意識した文様が描かれている。５は表裏とも刷毛が施される。４・５は形象埴輪の破片であるということ以外は不明である。

第25図６は円筒埴輪の底部である。縦・横両方向の刷毛が見られる。

第25図７・８は横方向の刷毛を有する円筒埴輪片である。共に朱塗りの痕がある。

第25図９は円筒埴輪の底部である。縦刷毛で、透孔と突帯が見られる。

円筒埴輪を時期的に見ると横刷毛の７・８はやや古く、５世紀後半と考えられ、他の縦刷毛のものは６世紀以降と考えられる。

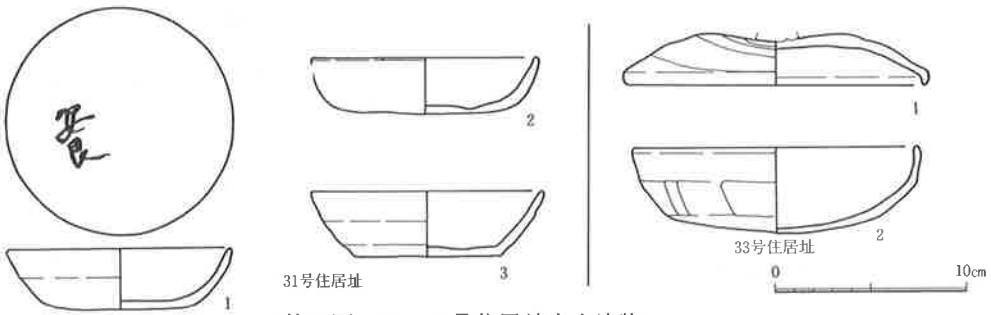
第４節　奈良・平安時代

本時代の検出の遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器である。水田、畑状遺構及び遺構外からは破片のみの出土である。

住居址出土遺物　（第26・27図　　**図版**12　表９・10）

奈良時代の住居址からは土師器の杯、須恵器の坏・蓋が出土している。

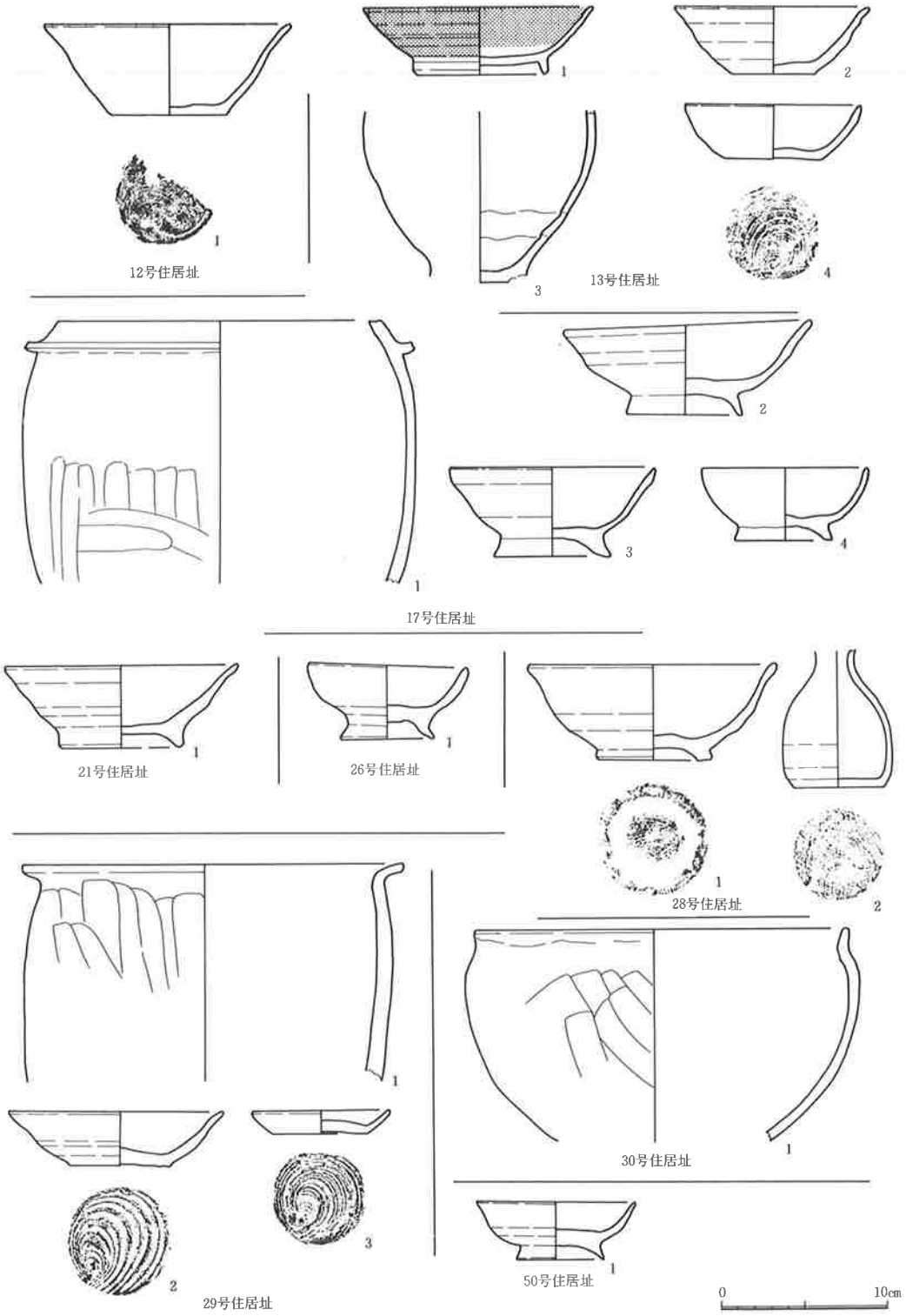
平安時代の住居址からは土師器、須恵器、鉄器が出土している。鉄器は掲載しなかったが、刀子、鎌等が出土している。



第26図　31・33号住居址出土遺物

表９　31、33号住居址出土遺物観察表

住居址番号	番号	器形 残存度	器高 口径(cm) 底径	器形ー成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
31号住	1	坏	3.2	口縁部横ナデ、内面墨書、内面指痕。	細かい。	良好	褐色	41貯
			11.7	底部静止糸切り。				
		ほぼ完形	5.0					
	2	坏	3.0	口縁部横ナデ、内面指痕。	細かい。	良好	褐色	51、52貯
		¾残	11.8	底部静止糸切り。				
			6.0					
	3	坏	3.5	回転糸切り後底部周辺を回転ヘラケズリ。	小石含む。	良好	灰褐色	フク土 須恵器
		¾残	12.0					
			7.8					
33号住	1	蓋	残2.7	ロクロ成形、天井部回転ヘラケズリ調整。	小石を含む。	良好	灰褐色	4 須恵器
		¾残	15.6					
		ツマミ欠損	——					
	2	杯	4.6	2段の稜を持つ、口縁部横ナデ、外面ヘラケズリ。	細かい。	良好	褐色	6
		¾残	14.8					



第27図　12・13・17・21・26・28・29・30・50号住居址出土遺物

表10　12、13、17、21、26、28、29、30、50号住居址出土遺物観察表

住居址番号	番号	器形 残存度	器高 口径(cm) 底径	器形―成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12号住	1	坏 ½残	5.5 14.8 7.0	ロクロ成形、底部回転糸切り。	細かい。	良好	褐色	1
13号住	1	坏 ½残	4.1 13.8 7.6	高台付。ロクロ成形。底部回転糸切り。	細かい。	良好	灰褐色	灰釉
	2	坏 ½残	4.1 11.8 5.0	ロクロ成形、底部回転糸切り。	小石を含む。	良好	灰褐色	1カマド須恵器
	3	台付壷 ½残 脚・口縁部欠	残10.5 ―― ――	口縁部内彎ぎみになる・内面接合痕あり。	小石を含む。	良好	外面、黒褐色 内面、褐色	5床
	4	杯 完形	3.3 10.6 5.8	ロクロ成形、底部回転糸切り。	細かい。	良好	褐色	4床
17号住	1	羽釜 ½残	残16.0 19.2 ――	口縁部内彎する。鍔の部分角ばる。口縁部横ナデ。 外面胴部ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	褐色	1、3カマド
	2	坏 ¾残	5.4 14.7 7.1	高台付、ロクロ成形、底部回転糸切り。	細かい。	良好	赤褐色	
	3	杯 ½残	5.5 12.4 7.5	高台付。内面ミガキ、ロクロ整形。 底部糸切り技法不明。	砂粒を含む。	良好	褐色	5、9カマド
	4	杯 完形	4.4 10.0 5.8	高台付。内面未調整。ロクロ整形。 底部回転糸切り。	砂粒を含む。	良好	褐色	6カマド
21号住	1	坏 一部欠	5.0 14.0 7.5	高台を持つ、ロクロ成形、底部回転糸切り。	砂粒、雲母片を含む。	良好	淡褐色	1床
26号住	1	坏 完形	4.5 9.5 5.6	高台を持つ。「八」の字に開く。内面ミガキ、ロクロ整形。 底部回転切りはなし後ロクロ成形。	小石を多く含む。	良好	褐色	3カマド
28号住	1	坏 ½残	5.8 14.8 6.8	高台を持つ、ロクロ成形、高台部接合痕あり。 底部回転切りはなし。	砂粒を含む。	良好	淡褐色	14床
	2	小形壷 ほぼ完形	残8.3 ―― 5.5	とっくり形、口縁部つぼまる。ロクロ成形。 底部回転切りはなし。	小石を含む。	良好	灰褐色	20
29号住	1	甕(土釜) 底部欠	13.2 23.0 ――	口縁部直角ぎみに折り返す、胴部ヘラケズリ。	小石、砂粒を多く含む。	やや不良	赤褐色	1、2、3床
	2	坏 ¾残	3.3 12.8 6.5	ロクロ整形、底部回転切りはなし。	小石、砂粒を含む。	やや不良	灰褐色	7床
	3	坏 ほぼ完形	1.4 8.2 5.6	ロクロ整形、底部回転切りはなし。	砂粒を含む。	良好	褐色	9床
30号住	1	鉢 ½残 底部欠	12.9 22.5	外面ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	橙褐色	29、30 32カマド
50号住	1	坏 完形	3.5 9.5 5.2	高台を持つ、「八」の字状に開く、内面黒色処理、ミガキ。 ロクロ整形。底部回転切りはなし後ロクロ整形。	砂粒を含む。	良好	外面、灰褐色 内面、黒色	床

第5節　中　　世

中世の遺物は1・2号井戸と4号土坑から出土している。

第1項　井戸出土遺物

1号井戸からは内耳土器が出土している。底部が欠損する。中層からの出土である。

2号井戸からは茶臼が出土している。1/4片で中層からの出土である。

第2項　4号土坑出土遺物

土師質皿と、脚を有する土器の破片が出土している。

第Ⅵ章　ま と め

本遺跡検出の遺構・遺物は縄文時代から中世に至るまでのものである。

縄文時代

遺物のみの検出である。前期後半諸磯ｂ、ｃ式、興津式、中期後半加曽利ＥⅡ、Ⅲ式、後期前半堀之内式。晩期前半安行Ⅲｂ式の遺物が検出された。

弥生時代

住居址２軒が検出された。共に浅間Ｃ軽石（４世紀中葉降下と考えれている。）を多量に覆土中に含んでいる。

遺物の出土は少ないが、後期赤井戸式のものと思われ、弥生時代でも後半に位置づけられる。

古墳時代

本遺跡において主体をなすものである。住居址22軒、円形周溝、館跡が検出された。

住居址は前期と中期のものが中心である。覆土の状態から円形周溝は前期の可能性が強い。

中期の住居址は調査区東側に集まり、館跡との直接の関係が想像される。特に柵列に切られる20・23・27号住居址、堀に切られる14号住居址は、主軸方向がほぼ同一方向である。これらの住居址から出土した遺物は５世紀後半と考えられる。

館跡の堀の底部付近に認られる榛名山二ッ岳降下ＦＡ層（６世紀前半降下と考えられている）の堆積から、館跡の築造時期は５世紀後半から６世紀前半と考えられ、さらにしぼると、６世紀初頭前後の時期が有力である。古墳時代後期の遺構は本遺跡では検出されていない。

奈良・平安時代

住居址16軒と畑状遺構・水田址が検出された。

奈良時代の住居址は８世紀後半と思われる。

平安時代の住居址は10世紀前半のものと、11世紀以降のものに分かれる。

畑状遺構・水田址は共に浅間Ｂ軽石（12世紀初頭降下と考えられている。）直下で検出されている。

中世

井戸２基が検出されている。

本遺跡の周辺は近年調査例が増し、本遺跡で検出されなかった古墳時代後期の住居址がまとまって検出されている。西大室地区全体を通しての古墳時代の集落の変遷を追える程資料が増加している。

館跡は堀と柵列で囲まれた内部が、ほとんど調査区外のため不明な点が多い。館跡の年代と最も近い築造年代の古墳は前二子古墳であるが、両者の関係を裏づけるものは今回の調査では検出することができなかった。

公共事業

あとがき　　梅木遺跡の保存について

前橋市西大室町2560番地他の地において発掘調査（住宅建設予定地・道路等）、確認調査（農地・家屋の庭になる部分）を実施した。その結果家屋集団移転の東側、桂川の右岸で環濠及び柵列が発見された。

深さ約１ｍ、幅５～６の溝があり溝の内側に約５～６ｍの位置に整然とした柵列が約1.8m間隔で柱穴の大きさは約30㎝、深さ50～60㎝である。

環濠の溝の底部から10㎝位の所にＦＡ層が発見されたため溝がつくられたのはＦＡ（榛名山二ッ岳噴火の火山灰）降下の直前かそれ以前と思われる。

環濠の南西部には、張出し部分がみられる。（地層の乱れから確認できなかった。）

本地域周辺には、国指定史跡、前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳、赤堀茶臼山古墳、伊勢山古墳等の前方後円墳があり、これらの古墳とは近い距離に位置している。

また本地域は、上毛野氏の有力拠点とする考えもあり、発見された環濠、柵列等から古墳を築造できる首長クラスの居館跡ではないかと考えられる。

本居館跡の構築時期が溝の底部から発見された火山灰であるＦＡのあり方、住居跡を切っての溝、住居跡内に柵列がある。住居跡は和泉期（５世紀後半）のものでありある程度限定された時期のものとなり、特に前二子古墳との関連を考えることができるものである。

そのため、本居館跡の保存について下記の通り協議調整を重ねた。

大室公園整備に係る公園、文化財関係調整の経過（梅木遺跡保存に関する経過を含む）

（居館跡をここでは環濠とする表現で協議をしている。）

60.５.20　家屋集団移転地造成に係わり、文化財調査の必要性有を確認し調査主体者は、前橋市教育委員会とする。

大室公園整備については、公園、文化財両者が協調と整合を図って事業化するという基本姿勢を確認する。

60.８.８　家屋集団移転地の発掘調査開始する。終了の目途を一応60.11.25を予定する。（４カ月間の調査）

60.９.５　県教委文化財保護課に大室公園整備計画について説明する。

概ね10年、総事業費50億円、保存と整備の２面性をもつ事業であり、公園整備の具体化に向けては、文化財保護関係者と調整をはかりながら進めていく旨の説明する（公園緑地課、社会教育課）

その際、県教委文化財保護課からの要望として、公園整備の全体計画を決定していく中で組織化（整備委員会のようなもの）とし充分検討を加えるように。

60.11.19　前橋市文化財調査委員会議に「大室公園整備計画」について公園緑地課より説明をする。文化財調査委員より整備検討委員会の設置要望が出される。検討をし組織化していく計画である。（全庁的、各専門家、学識経験者を含めて）

60.12.７　市文化財調査委員に梅木遺跡の概要を説明する。

60.12.11　文化庁加藤調査官に「大室公園整備計画」について説明する。
（県教委文化財保護課。市文化財保護課。公園緑地課）

60.12.21　国立歴史民俗博物館白石太一郎教授　他３名来跡

60.12.26　家屋集団移転先の発掘調査、11月下旬までの予定で進められていたが、とりあえず現場での調査は本日で終了とする。環濠の測量、柵列の測量、写真等の記録に万全を期すべく調査を進めていた。（調査期間１カ月延びる）

61.１.７　環濠の取り扱いについて、公園緑地課、社会教育課と協議する。この段階では環濠部分全てが発掘調査されていない。しかし、盛土により保存することで基本的に一致する。

61.１.７以降　土地所有者に移転先の位置を確認する。（公園緑地課）

61.１.25　環濠部分の未発掘地区の調査を続行し南辺の規模及び南面の溝のまがり方、張り出し等について確認するために協力をいただきたい旨申し入れをする。埋戻しをする際にバックフォー等の無償借用の了解を得られた。

61.１.30　埋戻し作業方法の確認、埋戻しの順序の確認、調査を続行する箇所の確認を公園緑地課と現地協議し確認し合う。又、環濠部分については50㎝以上の盛土によって保存するよう協力を求める。

61.１.30　前橋市文化財調査委員に梅木遺跡の環濠、柵列の規模、特長、築造時期、火山灰（FA）の状況について説明し、今後の取り扱いについて協議する。

①記録保存に万全を期す

②土盛りの工法（50㎝以上）で現状保存を申し入れる。

③未確認部分、北側の大室公園予定地区内についても今後とも発掘調査を続け、本遺跡の性格規模を明らかにする等が確認される。

61.２.３～８　発掘調査再開される。環濠の東隅の曲り、南西の曲りの柵列を確認する。西側の環濠の延長線を調査し確認する。ただし南西の張りだしの溝の全体像不明。

61.２.７　奈良国立文化財研究所長坪井清足、明治大学教授大塚初重、文化庁調査官加藤県文化財保護課参事井上唯雄　他３名来跡

61.２.８　写真撮影、残務整理

61.２.10　環濠の約半分、東側で宅地造成計画と環濠の高さを検討すると、切り土になる部がでてくる。そこで現況高より50㎝高く盛土し保存を計るよう計画変更（設計変更）をして宅地造成が出来ないか検討を申し入れる（現状保存の手法をとるように）

61.２.10　読売新聞より梅木遺跡の概要、豪族の居館跡かと報道される。

61.２.17　前橋市議会、建築水道常任協議会に公園緑地部長より梅木遺跡の概要について報告される。

現在、発掘された〝環濠〟について平均50㎝の盛土をし現状保存する。

教育委員会と連携をとりながら進めている。

61.2.14　〝大室公園整備計画〟に係る家屋移転先埋蔵文化財〝環濠〟の取り扱いについて、公園緑地課、教育委員会と協議する。

記録保存、現状保存、現状保存の方法について

50㎝以上の盛土、道路の位置、工事方法、よう壁等について細部にわたり調整する。この結果をもとに地権者に説明し協力を得ることとする。

以上の協議、調整により現状保存のため設計変更をすることになった。

しかし、本居館跡においては、今後とも調査を継続する。発掘調査を実施した部分において将来的に公園内にとりこむ努力をする。

調査の継続により遺構の全体像、遺存状況によって復元整備が可能かどうか検討しいく計画である。

参考文献

石田川	尾崎喜左雄他	昭和43年
峯岸山遺跡発掘調査報告（第二次）	新里村教育委員会	昭和50年
清里・陣馬遺跡	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団	昭和53年
千網谷戸遺跡調査報告	桐生市教育委員会	昭和55年
富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群	前橋市教育委員会	昭和55年
西大室遺跡群Ⅱ	前橋市教育委員会	昭和55年
富田遺跡群	前橋市教育委員会	昭和55年
荒砥島原遺跡	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団	昭和55年
下郷	群馬県教育委員会	昭和55年
塚廻り古墳群	群馬県教育委員会	昭和55年
富田遺跡群・西大室遺跡群	前橋市教育委員会	昭和56年
西大室遺跡群	前橋市教育委員会	昭和57年
倉賀野万福寺遺跡	高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会	昭和58年
井出村東遺跡	群馬県井出村東遺跡調査会	昭和58年
上大類北宅地遺跡	高崎市教育委員会	昭和58年
松田猛　荒砥中屋敷Ⅰ遺跡		
浅間Ｃ軽石層に覆われた過渡期の文化		昭和58年
シンポジウム　古墳事現期の地域性	北武蔵古代文化研究会	
	群馬県考古学談話会	
	千曲川水系古代文化研究所	昭和59年
関越自動車道（新潟線）水上町埋蔵文化財報告書	水上町遺跡調査会	昭和60年
橋木博文　古墳時代首長層居宅その構造とその性格		昭和60年
荒砥二之堰遺跡	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団	昭和60年

写真図版

1．遺跡の位置と周辺（航空写真）

2．航空写真近景

図版2

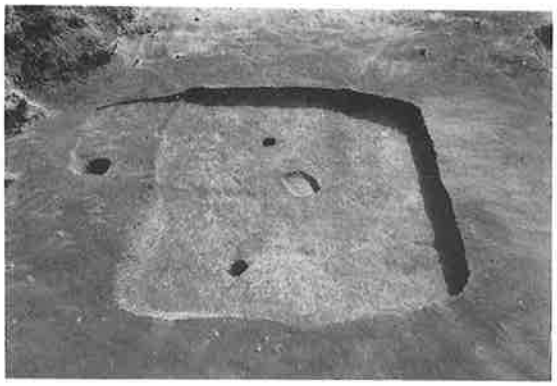
1．Cトレンチ中央確認

2．Aトレンチ中央確認

3．A区東側確認

4．A区西側確認

5．5F区確認



1．2号住居址

2．10号住居址遺物出土状況

3．左11・右3号住居址

4．11号住居址炭化物出土状況

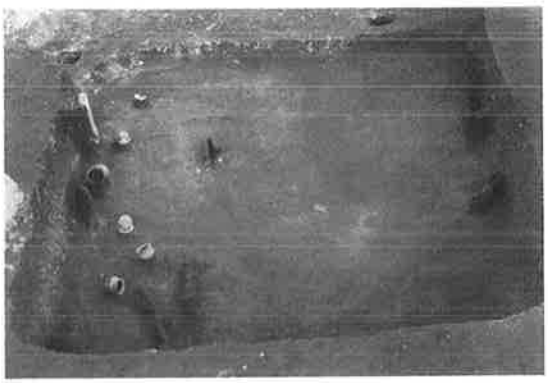
5．同

6．32号住居址

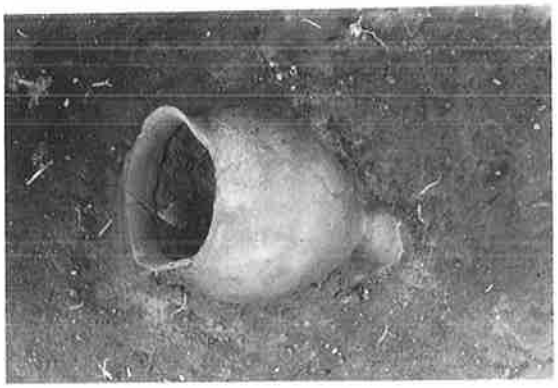
7．44号住居址遺物出土状況

8．同

図版4



1．35号住居址遺物出土状況



2．同

3．同

4．同炭化物出土状況

5．左下18・右上20号住居址

1．23号住居址・柵例

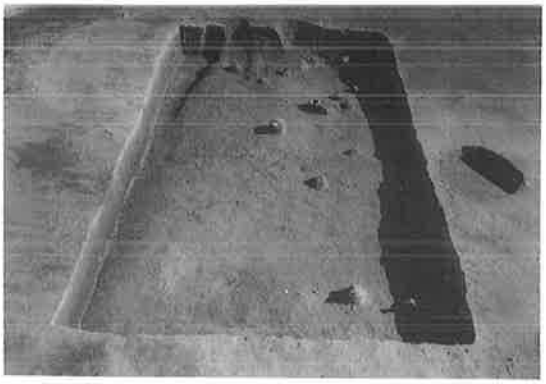
2．27号住居址遺物出土状況

3．同

4．同

5．同

図版6



1．14号住居址遺物出土状況

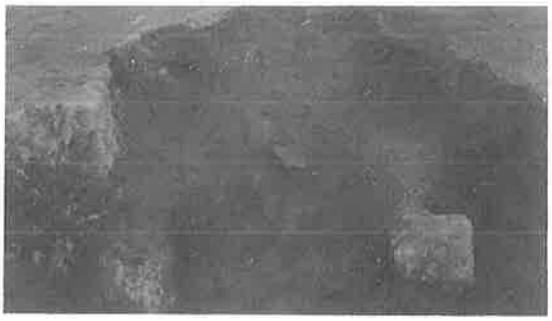
2．14号住居址カマド

3．館跡，堀南側中央断面

4．同

5．同南東側隅角付近断面

6．館跡，堀・柵列

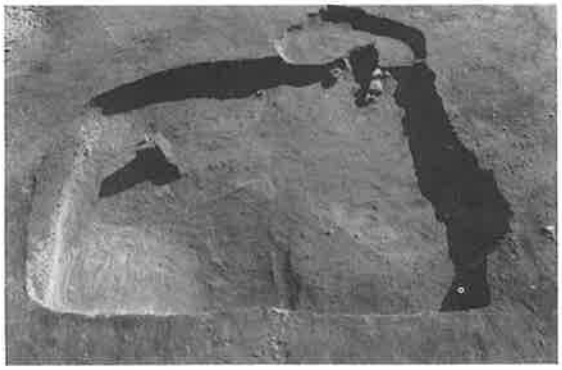


7．33号住居址カマド

8．31号住居址

1．30号住居址カマド

2．42号住居址カマド



3．17号住居址

4．17号住居址カマド

5．41号住居址

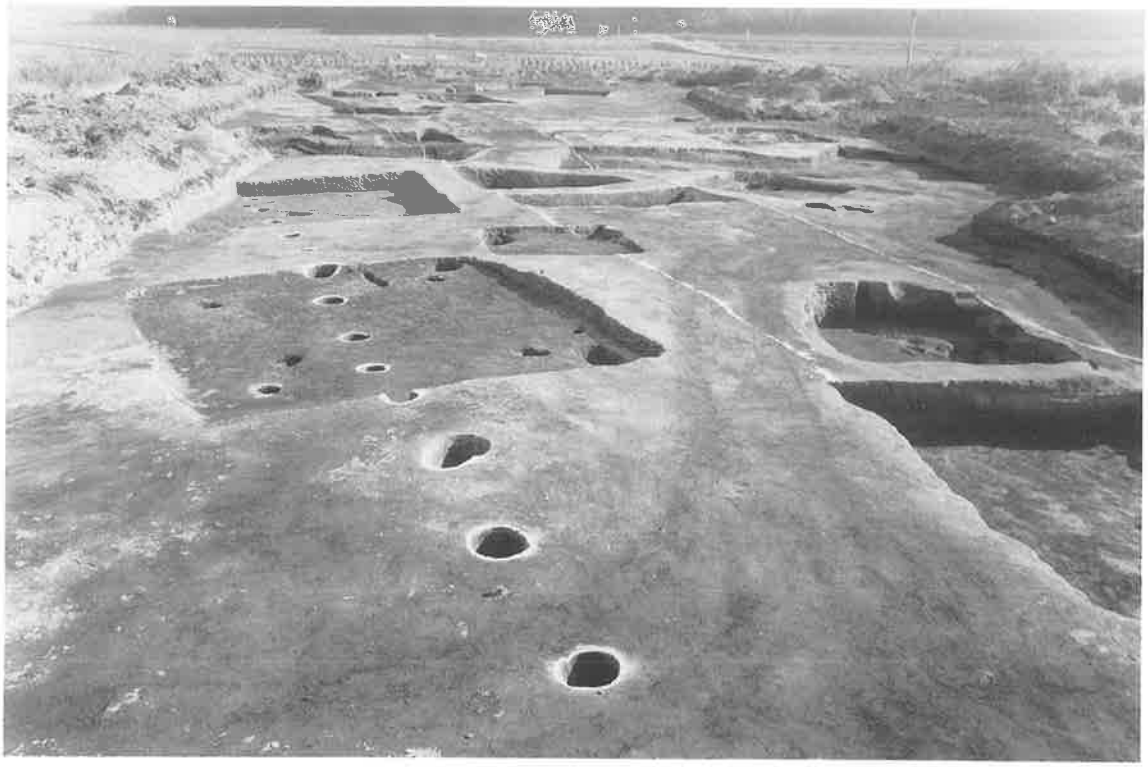
6．A区東畑状遺構

7．H区トレンチ水田址

8．2号井戸

図版8

1．D区全景



2．F区全景

9号住－1

10号住－2

11号住－2

11号住－3

35号住－1

35号住－2

35号住－3

35号住－4

35号住－5

20号住－1

20号住－2

20号住－3

20号住－4

20号住－5

9．10．11．35．20号住居址出土遺物

図版10

20号住－6

20号住－7

20号住－8

23号住－1

23号住－2

23号住－3

23号住－4

23号住－5

23号住－6

23号住－7

23号住－8

27号住－1

27号住－2

27号住－3

20．23．27号住居址出土遺物

27号住－4

27号住－5

27号住－6

27号住－7

27号住－8

27号住－10

27号住－9

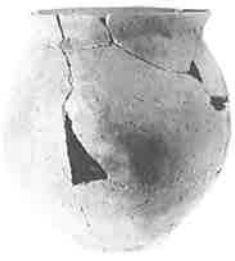
27号住－11

14号住－1

14号住－2

14号住－3

14号住－4



14号住－5

14号住－6

14号住－7

27．14号住居址出土遺物

図版12

14号住－8

14号住－9

14号住－10

3号住－1

33号住－1

33号住－2

13号住－1

17号住－3

17号住－1

17号住－2

17号住－4

28号住－1

28号住－2

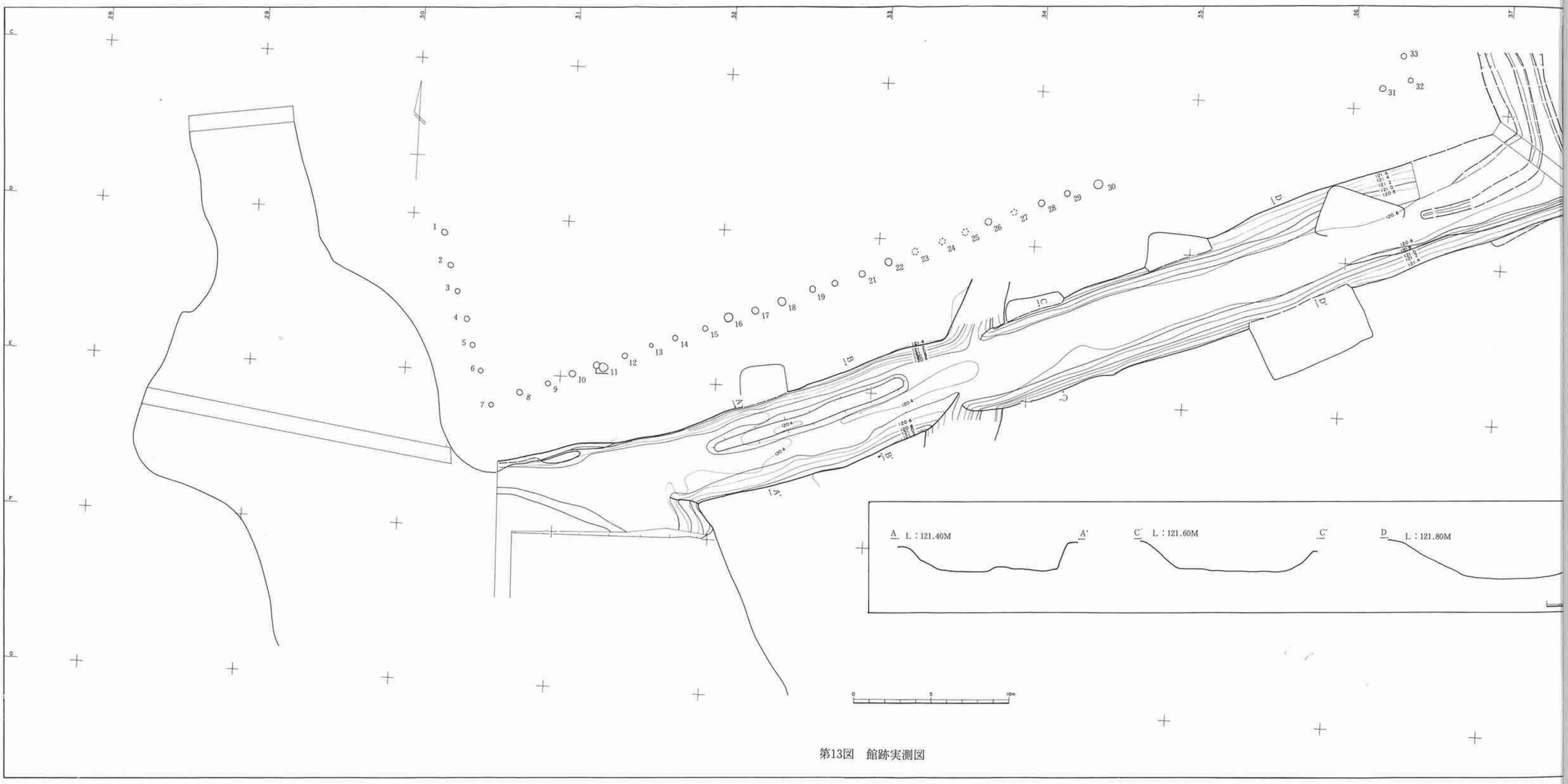
42号住－1

14．3．33．13．17．28．42号住居址出土遺物

前橋市教育委員会
24.11.22
第　　号
受付

前橋市三俣町二丁目10－2
前橋市教育委員会文化財保護課

梅　木　遺　跡
印刷　　昭和61年３月26日
発行　　昭和61年３月31日
前橋市埋蔵文化財調査団
印刷製本　　株式会社
文化総合企画
TEL. 0476 24 1563



第13図　館跡実測図